



ジュニアスポーツにおける指導の現状と今後の課題 (その1)

—北海道地区の野球におけるジュニア期指導に着目して—

大島 寛 ・ 大島 建 ・ 大島 安奈

要旨 本研究の目的は、ジュニアスポーツにおける指導について北海道地区の野球に着目し、ジュニア期指導の実態を明らかにし、一貫指導プログラムを構築するための基礎的知見を得ることである。そこで、小学生チームの指導者（E群）と中学生チームの指導者（J群）を対象に集合調査法によって質問紙調査を実施した。指導者に関する質問（5項目）、活動内容に関する質問（9項目）、活動量に関する質問（13項目）の計27項目を分析対象とし、質問紙によって得られた結果を集計し、27項目の質問について、E群とJ群を比較するために、2群間の分析にはt検定を用い、その他の項目についてはカイ二乗検定を用いた。有意水準はそれぞれ5%および1%とした。

Abstract The purpose of this research is to aim at baseball in Hokkaido area about teachings in a junior sport, make the reality of the junior period teachings clear and get the basic knowledge to build a consistent teaching program. So a survey by questionnaire was put into effect by an assembly research method targeted for the leader of an elementary schoolchild team (E group) and the leader of a junior high school student team (J group). We made total of 27 items of the question about a leader (5 items), the question about the active contents (9 items) and the question about the active amount (13 item) the analysis subject and totaled the result obtained by a questionnaire. Chi-square testing was used for an analysis between 2 groups about other items using t official approval to compare an E group and J group about 27 items of question. The significant level was set to 5% and 1% respectively.

キーワード ジュニアスポーツ, ジュニア期指導, 一貫指導プログラム, 指導者
原稿受理日 2018年1月31日

1. 問題と目的

野球の起源については様々な説があるが、R・W・ヘンダーソンの研究によって、今日ではイギリス起源説が妥当であると多くの有識者によって支持されている。野球は現在、北中米やアジアを中心に約110ヵ国以上の国で約3億人以上の人に親しまれているスポーツである。しかし、野球は東アジア、北中米では人気があるものの北欧では人気がなく、全世界に普及しているとは言い難い。

野球の歴史についてみると、日本への伝来は1873（明治6）年である。当時の開成学校（現在の東京大学）の米国人教師であるホーレス・ウィルソンが同校の学生に教えたのが始まりとされている（島田，2001）。その後、旧制高等学校の対抗試合から大学野球リーグ、中等学校（現在の高等学校）大会へと競技規模が拡大し、1934年にはプロ野球の前身である職業野球チーム、大日本東京野球倶楽部（現在の読売ジャイアンツ）が発足した。その後、多くのチームが新たに発足し競技の規模やレベルが発展したことで野球が国民に徐々に浸透していった。プロ野球のみならず高校野球も高い人気を誇っており、春と夏に行われる甲子園大会は連日マスメディアに取り上げられ、注目を集めている。また、東京六大学野球や社会人野球も非常に人気があり、多くの企業は野球チームを発足させ、企業の広告塔としても活動している。このように野球は、130年を超える歴史を背景に、現在はプロ野球を中心に国民的なスポーツとして隆盛を保っている。近年ではWBC（World Baseball Classic）やプレミア12のように、世界と日本のレベルを比較できる大会も増えてきている。日本のトップチームはWBCにおいて2006年の第1回大会、2009年の第2回大会で優勝し2連覇を果たしているが、2013年のWBC第3回大会、2015年のプレミア12では共にベスト4進出にとどまっており、近年は他国に苦戦を強いられている。

しかしながら、わが国における野球の組織体系については、多くの課題を抱えている。特に、各年代、各ステージにおいて各々の組織が乱立していることにより、指導体制に一貫性がないことは大きな課題として挙げられる。そのことにより、指導者養成においても確立されたプログラムが存在せず、選手にとって好ましくない状況を生んでいる。指導者養成制度を含む一貫した選手育成システムが確立されていない日本の現状について小俣（2010）は、日本における高い国際競技力は圧倒的な競技人口の多さを背景とした厳しい自然淘汰の競争力に依存していると述べており、今後更に少子化が進行し、野球の競技人口が減少していくことになると、日本野球の国際競技力の低下が危惧される。また、激し

い自然淘汰的競争は少年野球の年代にまで影響しており、自然淘汰的競争選抜の中では、未開花の優れた素質や可能性をもった選手がふるい落とされ、正当な評価や機会を与えずに埋もれてしまっている。このような状況から小俣（2010）は、ジュニア期の指導者は、発育発達過程にある無限の可能性を秘めた世代を指導しているということで、その可能性を最大限に引き出すことが義務であることから、指導者養成の制度が整備、強化されなければならないと指摘している。またジュニア期における過度なトレーニングや投げ過ぎによる身体損傷、燃え尽き症候群などの弊害が多発している状況が報告されている（植屋ら、1990；棚山、1995；船越ら、2001）。

一方、わが国において、統一された組織および一貫指導体制が確立されている近年の日本サッカーの発展に注目すると、西（2008）は、日本サッカーは「代表強化」、「指導者養成」、「ユース育成」の三位一体の強化策に取り組み、特にユース育成の面で、ゴールデンエイジの概念を中心とした育成期からの「一貫指導プログラム」を確立し、その中で発育・発達段階に応じたトレーニングを指導者が共通理解をもとに徹底すると述べている。野球ではアマチュア野球で世界トップクラスの強さを誇るキューバにおいて、岐部（2008）は、キューバ野球に関する文献研究と自身の留学経験から、キューバ野球には一貫指導が確立されていることを述べ、日本の野球の指導との対比から、日本の野球はキューバの指導法を参考にすべきであると述べている。

日本のアマチュア野球における組織の状況は各ステージにおいて各々の組織が乱立している中で、植屋・内藤（1990）は、勝利至上主義に伴う技術優先主義的、選手養成主義的な長時間練習や選手の体力、運動能力を超えたハードな練習やトレーニングがまかり通っている事態が確認されるとしている。また、藤原・堺（1989）は、スポーツ少年団における児童の発育・発達段階を考慮しない勝利至上主義的指導や競技志向傾向を批判している。つまり、野球界においては未だにこれまでの長い野球の歴史で培われた経験に頼った指導がなされているのが現状であり、日本の野球界で行われている指導には一貫性がなく、各組織がチャンピオンシップを目指すことが目的化される事態が横行している。しかし、今後少子化等の問題や野球の普及からトップレベルの指導まで発達段階に応じた指導の体系を構築しなければ国際大会で勝利できなくなるとともに、国内のレベル低下や衰退を避けることはできないだろう。そこで野球の一貫指導にまつわる研究を概観すると、柏口（1994）は、全力投球については1日50球以内で1週間でも300球を超えないプログラムを用意すべきと述べているものや、岡崎（2009）のように、スポーツ医学の観点から、15歳以下の野球肩や野球肘の症例についてまとめ、負担のない投球フォームを紹介しているも

の、植屋・内藤（1990）のように、発達体力学の観点から、基本的には学年が上がるごとに形態、体力、運動能力、投能力は発達していく状況が確認されたとしている少年期の身体成長や体力に関連した、特に投能力について述べているものが主になっている。また、馬見塚（2012）は、小学校5年生の約半数は肘の障害の痕がエコーで確認されると指摘し、ライセンス制度導入により指導者が一定レベルの医学的知識を持つことが必要であると述べている。これらのことから、少年野球の現場が抱える問題の観点で指導者養成の必要性がしきりに叫ばれている。

また、野球での様々な技能を習得する最適な時期とその方法を知ることについて、大学生を対象に研究調査した奈良（2009）は、大きく二つに分類される中学校部活動と中学硬式クラブの競技環境の実態及び、実際の指導（特に技術）が現在の自分の技能に及ぼした影響について明らかにすることにより中学野球の望ましい指導を構築するための基礎的資料を得た。その結果、学校部活動において特に実戦的な練習が不足している傾向にあり、中学期は戦術的な判断能力の深まりが期待できる年代であるので、効率よく戦術能力が身につくような練習方法を開発する必要性があると述べている。また、古山（2011）は、大学野球選手の少年期での様々な技能の習得要因、習得時期を明らかにすることにより、野球の一貫指導プログラムを構築するための基礎的知見を得た。「戦術技能習得」の時期が高校期にあることから、小学期、中学期に勝利優先のチームづくりによる戦術指導が行われてしまったならば、効率よく技能を習得する時期を逃してしまうことになり、野球選手としての技能を最大限に伸ばせなくなる可能性があると考えられる。また、技能レベル向上のピーク期は、身体成長のピーク期より遅れる（ずれる）傾向にあることを指導者が知っておくことは非常に重要で、このことにより身体発育を考えた余裕のある指導が実現でき、選手の伸びしろを判断する一つの指標になる可能性もあることから、選手の技能レベルの効率的な向上、怪我の減少につながるのではないかと述べている。これらのように、ジュニア期における肩・肘を中心とした障害予防の研究や身体成長、体力とパフォーマンス能力の関係、技能の習得要因、習得時期、中学野球の運営上の問題点や技能指導の現状は把握されつつある。しかしながら、各世代で発育・発達段階に応じた指導が実際に行われているのかといった観点によるジュニア期指導の現状について明らかにされていない。

これまでの研究によって明らかにされてきた障害予防の研究や身体成長、体力とパフォーマンス能力の関係、技能の習得要因、習得時期といった研究成果をジュニア期指導の現状を明らかにした上で問題提起をしなければ発育・発達段階に応じた指導を指導者に提言できないといった問題点がある。そこで、ジュニア期指導の現状を調査するにあたって、現

在、野球界で初めてプロ・アマの垣根を越えた取り組みが始まり、北海道野球協議会と北海道日本ハムファイターズが連携し、野球独自の一貫指導プログラムを構築するために動き出した。

これらのことを総括すると、日本の野球において一貫した指導体系、指導体制を構築することが、日本国内の野球レベルの維持、向上につながり、トップチームの国際大会での活躍にもつながるものと考えられる。その一貫指導体系の構築のためには様々な知見の積み上げが必要となり、特にジュニア期世代の指導に関する体系化が急務である。しかしながら、ジュニア期世代でどういった指導者がどのような視点にもとづいて指導を行っているのかを述べている研究は少なく、各年代の発育・発達段階に応じた指導がなされているかということについては研究されていない。そこで、現状調査の先がけとしてアマチュア野球におけるジュニア期指導について、北海道地区で行われている指導の実態を明らかにすることにより、一貫指導プログラム構築へ向けた基礎的知見を得ることは、今後の野球界において非常に意義があると考えられる。

ジュニア期における野球の指導体系について

わが国の野球の組織は、各年代によって複数の連盟が乱立しているような状態で、トップダウンの一貫指導システムの確立には現状として多くの問題がある。関岡（2004）は、少年野球は多くの組織が混在し、それぞれが関係をもたず独立して運営しているとし、このような状態で、特に問題であるのは、他団体との交流試合を禁止していること、ルールなどが統一されていないことであり、技術指導が一本化されない要因になっていると述べている。さらに、情報の質と量が不足している少年野球指導者は、基本的な共通理解がなく個人の経験主義的指導に頼り自チームのみの完結型指導となってしまう傾向にあるとしている。宮内（1979）も、エリートスポーツとしてのリトルリーグ野球の調査において、子どもにとっても、親にとっても、リトルリーグ野球が「エリートスポーツ」となるには、「勝つ」ということが前提となる。スポーツである以上、「勝敗」が問題となることは当然であるが、「エリート意識」を満足させるためには、より高度な組織を作り、より大きな大会を運営し、それに出場できる強いチームを作ることが要求されようと述べている。

これらのことにより、今日におけるジュニア期の野球指導体系は、各々の組織がそれぞれチャンピオンシップを掲げ、勝利至上主義のもとに運営が行われており、また指導者の経験に頼りすぎた指導が行われているということがわかり、一貫指導システムの体系化がされていない現状にあるということがわかる。

ジュニア期の指導および現状に関する研究について

スポーツ医学の観点から、岡崎（2009）は、15歳以下の野球肘・野球肩の症例についてまとめており、その障害を起している少年野球選手の5つの共通点として、1）体が前後、左右に傾いている。2）肩の開きが早い。3）肘が下がっている。4）手首の返しが早い。5）反対側の手が遊んでいる。の5つを挙げ、以上の欠点が、障害を起した投球フォームに高頻度で出現し、投球フォームの改造は少年野球選手を救うために極めて重要であると述べている。また、森下ら（1985）は、中学生野球部における肘関節障害の実態を調査し、肘レ線内側異常があっても、各体力要素の低下は少なく、疼痛軽減すれば、早期に野球復帰可能と考えられる。しかし、肘レ線外側部異常がある者は、投球中止などの処置をとり、レ線上の改善とトレーニングによる各体力要素の向上をみてから、野球に復帰させるべきであると論じている。また、体力学の観点から、植屋・中村（1991）は、野球スポーツ少年団の活動に関して、試合時の活動量を測定し、球速、背筋力、握力はイニング数や球数の増加につれて明らかに低下する傾向を報告しており、定量的な測定による実態を踏まえて、適正な活動量を設定することが大切と述べている。

また、児玉ら（1993）は、青少年期のスポーツ障害を意識した体力づくりを含め、野球の技術向上に役立つ体力トレーニング種目をみつけることを目的とし、ボール投げとホームラン走の項目は、体格および体力（身長、除脂肪体重、背筋力）と深い関係があり、バットスイング角速度は調整能力も関与していると推察されると報告している。

また、野球における各技能の習得時期については、古山（2011）が「大まかな技能習得時期の流れは、走塁および守備技能は小学生年代、送球および投球技能、判断能力は中学生年代であった」と報告している。中学生年代の指導の現状については、坂本（2008）が、中学生チームの指導者について「硬式クラブの指導者の方が、技術指導の能力が高く、選手に対して大きな影響力をもつ存在であった傾向がみられた」と報告しており、競技環境の違いが自己の技能に与えた影響については、奈良（2009）が「中学生年代の学校部活動において特に実戦的な練習が不足している傾向にある」と報告している。

このように、ジュニア期における指導の研究に関しては、肩、肘を中心としたスポーツ障害の予防に関する研究や身体成長、体力とパフォーマンス能力の関係などの研究が多く、さらに、指導の現状についての研究に関しては、中学生年代を対象としたものがほとんどである。一貫指導を体系化するうえで小学生年代と中学生年代でどのような視点にもとづいて指導を行っているのかを述べている研究は少ない。そこで、今回は一貫指導体系が整っている他国における野球の一貫指導プログラムについてまとめていくことにする。

他国における野球の一貫指導プログラムについて

岐部（2008）は、キューバ野球の一貫指導の構築と運営がその強さの要因であると考え、このキューバの野球構造を検証しているが、その中で、キューバの野球に関しては低年齢からの指導が確立されている。決して無理をせず選手のための指導がされており、その上日本の野球指導より理論的である。キューバ野球の一貫性指導の特徴は、理論的なトレーニング計画、トレーニング管理が行われており、選手の年齢、特徴、能力に応じた指導が行われる。発育に応じたトレーニングをすることを基本として、野球に対する体力の向上を目指している。キューバでは、大人になってから野球選手として一番良い時期を迎えると考えている。そのための準備段階として段階的に指導が行われ、各年齢における走力、投力、打力の体力を数値化することによって到達目標が設定されている。到達目標、指標が明確でその段階に応じた体力や技術を要求しているのである。また、常に評価が行われ、記録は年齢ごとに作成され個別化される。また、ジュニアからナショナルまでの指導内容、方法が確立されており、同一線上の野球指導、指導システムであると紹介している。そして、このことを日本の野球構造と比較することで、日本の野球における今後の指導現場に生かしていくべきであると述べている。

このように、国際大会で結果を出している国においても、一貫指導体系が確立されていることは、日本の野球においても一貫指導体系の確立は必要なことであると考えられる。

他競技の一貫指導プログラムの現状について

西（2008）は、サッカーに育成年代を指導するにあたり、各年代で習得可能な技術および戦術、体力、精神力などの内容や効果的な練習方法が異なり、年代をゴールデンエイジ（9歳から12歳）の前後で4つに区分した。それぞれの区分における身体的および心理的特徴を解説し、日本サッカー協会が提唱する一貫指導の重要性と現状を、世界強豪国の育成システムの成功例をもとに検証した。その結果から、今後の日本の育成システムについて考察を行い、テクニックやフィジカルの面から、その「個」のレベルに合ったトレーニング環境を提供することは育成年代において非常に重要で、発育・発達段階に応じたトレーニングを指導者が共通理解のもとに徹底することというのは、日本の強化方針と世界とでは共通点がある。ただ、決定的な違いは、サッカーの歴史と底辺への広がり、そして、選手を育成する指導者のレベルであると述べている。また、選手育成システムについては、各年代で発育・発達段階に応じたトレーニングを指導者が共通理解のもとに徹底し、質の高い選手育成のためには、日々指導する指導者のレベルアップが必要不可欠になると述べ

ている。

また、原・榎本（2005）は、水球は他のスポーツ競技同様に、クラブ活動を中心とした学校教育システムの中で発展をしてきたが、このシステムには若年代からシニア選手に至る長期的な指導理念に基づいた具体的施策が不足していることが浮き彫りにされたとしている。そこで、国際的競技能力向上を目指し、財団法人日本水泳連盟水球委員会は「水球一貫指導プログラム」を開発し、その運用に着手した。そのプログラムを国内外の育成プログラムの特徴に照らしながら分析し、今後の課題を世界最先端の水球競技における技術と戦術を常に照らし合わせつつ内容を柔軟に対応させることと、競技への導入段階である最も初心者レベルにおける、より効果的なプログラムを充実させることと述べている。

これらの研究においてもわかるように、近年目覚ましい発展を遂げているサッカーを始め、比較的競技人口の少ない水球においても、一貫指導体制の推進という立場から、より良い指導体系の構築を目指しているという現状が日本のスポーツ界にはある。

目的および課題

本研究では、ジュニアスポーツにおける指導の現状をアマチュア野球におけるジュニア期指導に焦点をあて、北海道地区で行われている指導の実態を明らかにし、一貫指導プログラムを構築するための基礎的知見を得ることを目的とする。そのため、以下の研究課題を設けた。

- ① 小学生チームおよび中学生チームの指導に携わる者のキャリアについて、その実態を明らかにすること。
- ② 小学生チームおよび中学生チームの指導者が日頃現場で行っている活動内容について、その実態を明らかにすること。
- ③ 小学生チームおよび中学生チームの指導者が日頃現場で行っている活動量について、その実態を明らかにすること。

2. 研究方法

(1) 研究対象

北海道野球協議会の協力のもと、北海道地区の小学生チームの指導者と中学生チームの指導者を対象に2015年8月から9月にかけて、アンケート調査を行った。小学生チームの指導者の対象チームは札幌市少年軟式野球連盟の156チームであった。中学生チームの指

指導者の対象チームは札幌市中学校野球協議会81チーム，ボーイズリーグ日本少年野球連盟北海道支部14チーム，日本リトルシニア中学硬式野球協会北海道連盟35チーム，日本ポニーベースボール協会北海道連盟11チーム，合計141チームであった。対象者は，北海道地区にある小学生チームの指導者156名および中学生チームの指導者141名であった。なお，本研究は北海道野球協議会の協力のもと，事前にアンケートへの協力について承認を得たうえで，各チームの指導者にはアンケートの主旨やデータの扱いについて事前に説明を行い，アンケートの提出をもって同意を得た。

（2）調査方法

調査は，集合調査法によって質問紙調査を実施した。質問紙は，大部分を選択回答形式とした。調査全体での回収率については，質問紙依頼数297枚に対し，回収数が224枚であり，回収率は74.5%であった。調査を依頼した5連盟の回収率の詳細は次のとおりである。札幌市少年軟式野球連盟は，アンケート依頼数156枚に対し，回収数が140枚であり，回収率は89.7%であった。札幌市中学校野球協議は，アンケート依頼数81枚に対し，回収数33枚であり，回収率は40.7%であった。ボーイズリーグ日本少年野球連盟北海道支部は，アンケート依頼数14枚に対し，回収数12枚であり，回収率は85.7%であった。日本リトルシニア中学硬式野球協会北海道連盟は，アンケート依頼数35枚に対し，回収数35枚であり，回収率は100%であった。日本ポニーベースボール協会北海道連盟は，アンケート依頼数11枚に対し，回収数4枚であり，回収率は36.4%であった。

なお，本研究では質問紙への回答があった小学生チームの指導者140名（elementary school 群；以下，E群とする）と中学生チームの指導者84名（junior high school 群；以下，J群とする）を分析対象とした。

（3）調査内容

調査は，指導者の基本情報や指導環境，指導内容の実態や運営に対する考え方に関する内容であり，など計91項目の質問紙を用いた。本研究では，北海道地区の小学生チームおよび中学生チームで行われている指導の現状について，その違いを明らかにするために，指導者に関する質問（5項目），活動内容に関する質問（9項目），活動量に関する質問（13項目）の計27項目を分析対象とした（表2，表3，表4）。

(4) 分析方法

質問紙によって得られた結果を集計し、27項目の質問について、E群とJ群を比較するために、2群間の分析にはt検定を用い、その他の項目についてはカイ二乗検定を用いた。有意水準はそれぞれ5%未満および1%未満とした。

表1 アンケート回答者の内訳

グループ	所属カテゴリー	人数
E群	少年軟式野球	140
J群	学校部活動	33
	ボーイズリーグ	12
	シニアリーグ	35
	ポニーリーグ	4
合計		224

表2 指導者についての質問項目

指導者について
Q 年齢
Q 職業
Q プレーヤー歴
Q 最終野球歴
Q 指導歴

表3 活動内容についての質問項目

活動内容について
Q 1週間の練習内容について(シーズン)
Q 1週間の練習内容について(オフシーズン)
Q 技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視しているか(シーズン)
Q 技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視しているか(オフシーズン)
Q 技術と体力のどちらを重視した練習か(シーズン)
Q 技術と体力のどちらを重視した練習か(オフシーズン)
Q 技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習を行っているか(シーズン)
Q 技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習を行っているか(オフシーズン)
Q 体力づくりの練習では、ウエイトトレーニングを行っているか

表4 活動量についての質問項目

活動量について
Q 1週間に休養日は何日あるか
Q 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（シーズン・平日）
Q 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（シーズン・休日）
Q 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（オフシーズン・平日）
Q 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（オフシーズン・休日）
Q 1週間の練習量についての考え
Q 平日の練習量についての考え
Q 休日の練習量についての考え
Q 大会は1年間に何回あるか
Q 公式試合数は1年間におおよそ何試合か
Q 練習試合は1年間におおよそ何試合するか
Q 公式試合試合数についての考え
Q 練習試合数についての考え

3. 結果および考察

分析結果については(1)指導者について、(2)活動内容について、(3)活動量についての3項目に大別し、考察を述べていくこととする。

(1) 指導者について

図1は、「あなたの年齢をお答えください」という質問に対する回答を示したものである。平均年齢はE群が54.4±10.3歳、J群が46.8±12.1歳であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

図2は、「あなたの職業をお答えください」という質問に対する回答を示したものである。E群は「自営業」が23.0%、「サラリーマン」が56.8%、「公務員」が2.9%、「教員」が0.0%、「学校の職員」が0.7%、「市町村のスポーツ指導者」が0.7%、「企業スポーツクラブの指導者」が0.0%、「その他」が15.8%であった。J群は「自営業」が9.6%、「サラリーマン」が27.7%、「公務員」が14.5%、「教員」が32.5%、「学校の職員」が3.6%、「市町村のスポーツ指導者」が3.6%、「企業スポーツクラブの指導者」が0.0%、「その他」が8.4%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

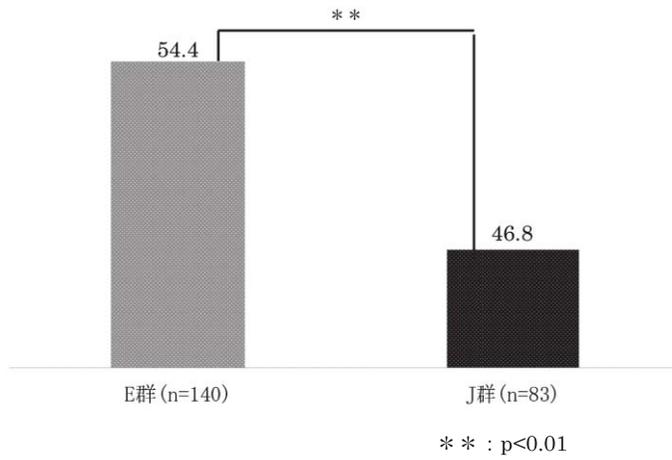
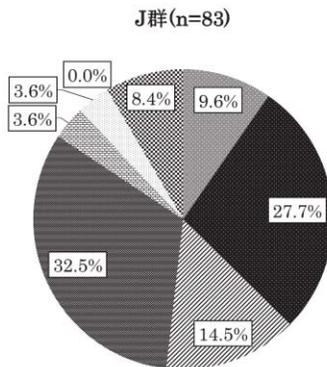
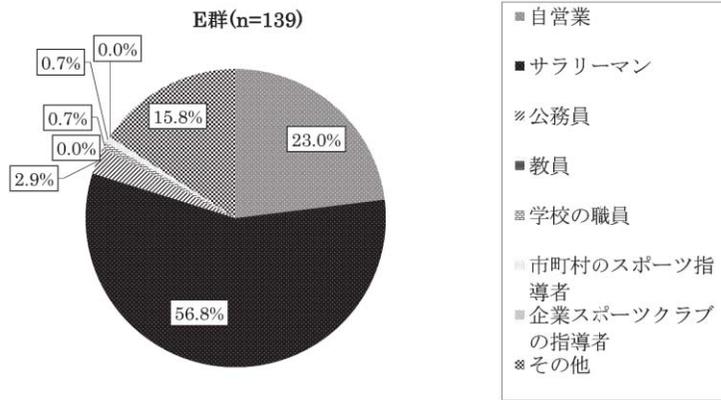


図1 指導者の年齢 (歳)



** : p<0.01

図2 指導者の職業

図3は、「プレーヤー（選手）としての経験年数」という質問に対する回答を示したものである。平均年数はE群が13.5±10.8年、J群が15.1±9.5年であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図4は、「現役最後のステージについて当てはまるものに○をしてください」という質問に対する回答を示したものである。E群は「小学校」が6.5%、「中学校」が27.6%、「高校」が36.6%、「大学」が8.9%、「社会人」が20.3%、「プロ野球」が0.0%であった。J群は「小学校」が3.8%、「中学校」が5.0%、「高校」が23.8%、「大学」が38.8%、「社会人」が27.5%、「プロ野球」が1.3%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

図5は、「指導者としての経験年数」という質問に対する回答を示したものである。平均年数はE群が17.0±10.9年、J群が14.0±9.1年であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.05$)。

職業について、J群は「教員」の割合が最も多かったのに対して、E群は「サラリーマン」の割合が最も多かった。本研究で対象とした中学野球チームは39.3%が学校部活動であり、そのほとんどが教員として指導に携わっていることから、今回の結果が表れたと推察する。一方、小学生チームの指導者は自身の職業とは別に、休日を利用して指導に携わっていることが推察される。少年野球の指導者については、河崎（2012）が「複数の『お父さんコーチ』が協力し合って運営している」と報告していることや、岩上（2014）が「いわゆる『お父さんコーチ』が平日の仕事をこなしつつ休日を使って子どもの指導にあたっている」と報告しているように、小学生チームの指導者は、「お父さんコーチ」と呼ばれるボランティア指導者の一種の使命感によって支えられていることがわかる。

最終野球歴について、E群は「高校」以下の割合が、J群は「大学」以上の割合が高かった ($p < 0.01$)。J群は教員として指導に携わる者が多いため、必然的に大学進学者が多く、大学以上で野球を続けた者が多くなったと考えられる。一方、E群で高校以下が大半を占めたことについては、先述したとおり、小学生年代の指導者が「お父さんコーチ」と呼ばれるボランティアに支えられていることが要因として考えられる。兼屋（2012）は少年野球の指導者について「少年野球の指導は主に『子供の社会性の育成』が中心として考えられている」と報告しており、プレーヤー経験が少なく、野球に対する知識や理解が不十分であっても、熱意さえあれば、指導に携われてしまう現状があると考えられる。

両群間でみられたプレーヤー経験の差は、現場で行われている指導に影響を与えていると考えられる。高校野球と大学野球のちがいについて、平井（2015）は「大学野球では、

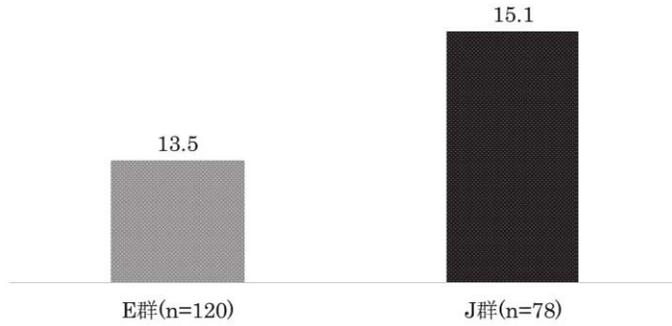
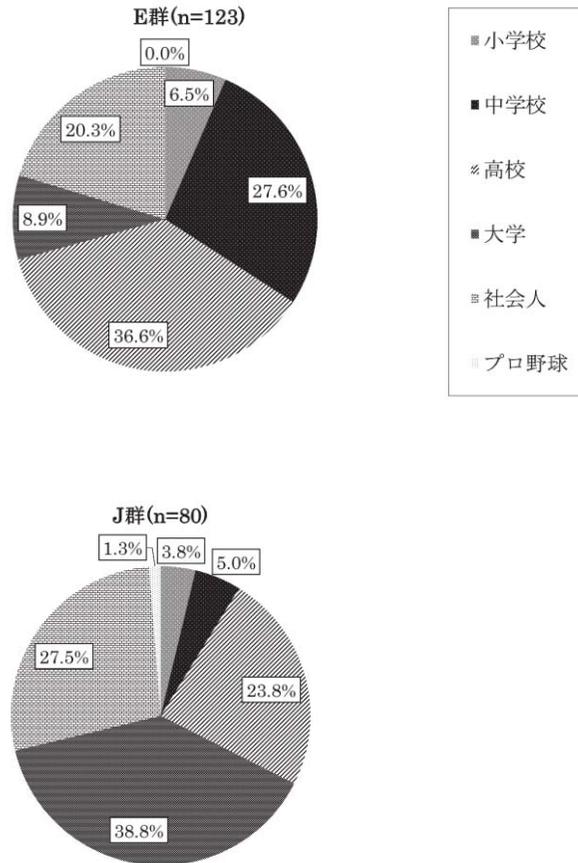


図3 プレーヤーとしての経験年数 (年)



** : p<0.01

図4 指導者の最終野球歴

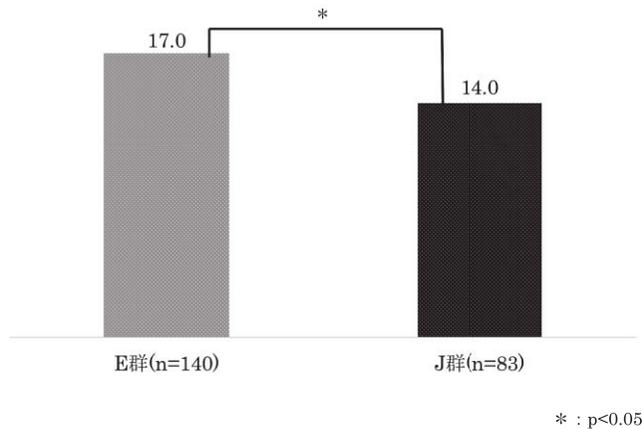


図5 指導年数（年）

高校野球などと違い木製バットを使用することにより投高打低の傾向があり、僅差での勝敗の決定が非常に多くなっている。そのため、一つひとつのプレーが勝敗に大きな影響を与える要因になる」と述べており、これらのことから大学野球は高校野球以上に高度な技術指導や、きめ細かい戦術指導を受けてきたと推察される。選手時代に経験した高度な指導は、現場で指導を行う上でも役立っていることであろう。ジーコ（1993）が「皮肉なことに、いくら選手として実績のある者が指導しても、それがすぐれた指導になるとは限らないからむずかしい。逆にさして名選手というわけでもないが、監督になってはじめて手腕を発揮する人もいる。選手としての才能と、監督としての才能はまったく別のことなのである」と述べているように、スポーツ界においてプレーヤー経験と指導力は別物であるという考え方が存在することは事実であるが、プレーヤー経験において高校以下が大半であったE群と大学以上が大半であったJ群とでは、指導力にも差が生じていると考えられる。こういった面から指導者講習を行い、指導者資格取得を義務化するシステムの構築が必要であると考えられる。指導者講習については、発育・発達段階に応じた指導という観点で行う必要があるが、小学生チームの指導者は、「お父さんコーチ」と呼ばれるボランティア指導者の一種の使命感によって支えられていると考えられ、指導者資格の義務化によって指導者不足に陥る可能性もあるため指導者資格の難易度も十分に検討する必要があると考えられる。

(2) 活動内容について

図6は、「1週間の練習内容についてお尋ねします（シーズン）」という質問に対する回

答を示したものである。E群は「毎日同じ練習内容」が2.9%、「ほぼ毎日同じ練習内容」が33.8%、「曜日によって異なる練習内容」が60.4%、「その他」が2.9%であった。J群は「毎日同じ練習内容」が0.0%、「ほぼ毎日同じ練習内容」が27.7%、「曜日によって異なる練習内容」が62.7%、「その他」が9.6%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

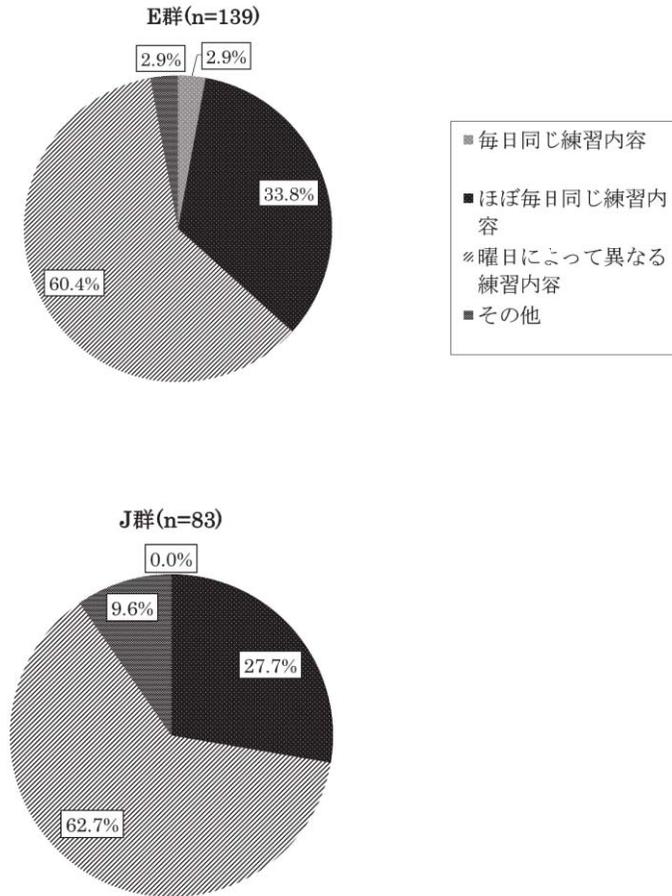


図6 1週間の練習内容について (シーズン)

図7は、「1週間の練習内容についてお尋ねします (オフシーズン)」という質問に対する回答を示したものである。E群は「毎日同じ練習内容」が5.8%、「ほぼ毎日同じ練習内容」が38.7%、「曜日によって異なる練習内容」が52.6%、「その他」が2.9%であった。J群は「毎日同じ練習内容」が3.7%、「ほぼ毎日同じ練習内容」が50.6%、「曜日によって異

なる練習内容」が39.5%、「その他」が6.2%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

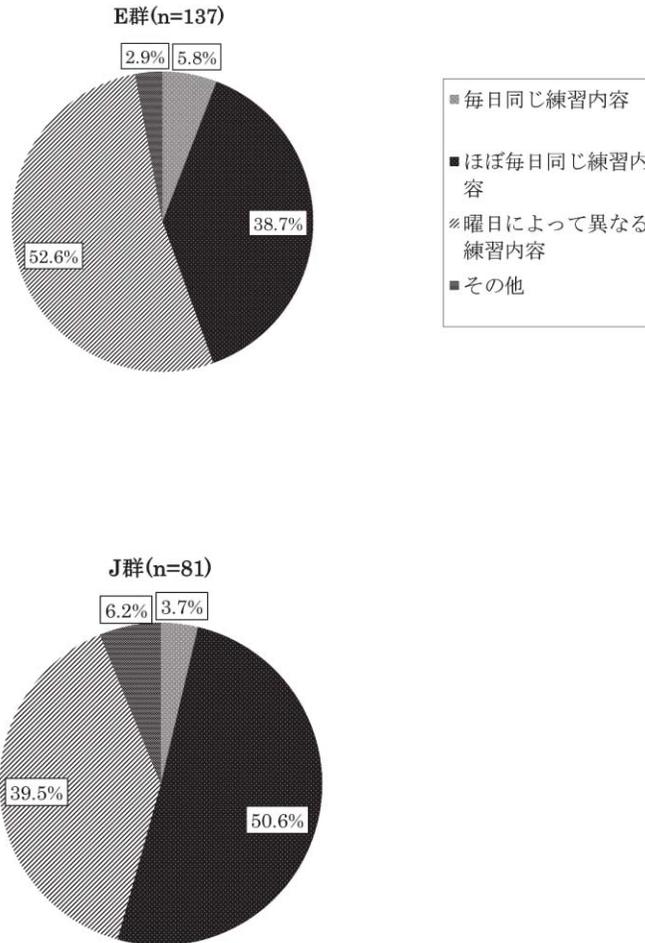


図7 1週間の練習内容について（オフシーズン）

図8は、「技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視していますか（シーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「全習法を重視した練習」が16.4%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が43.6%、「どちらかといえば分習法を重視した練習」が23.6%、「分習法を重視した練習」が8.6%、「どちらともいえない」が5.7%、「その他」が2.1%であった。J群は「全習法を重視した練習」が15.7%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が44.6%、「どちらかといえば分習法を重視した練習」

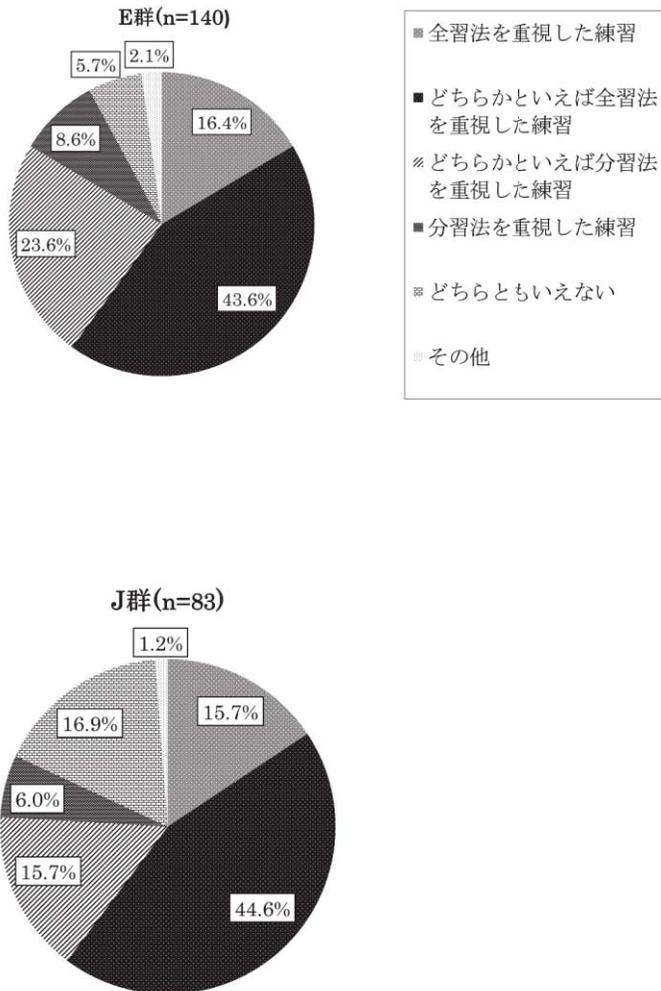


図8 技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視しているか（シーズン）

が15.7%、「分習法を重視した練習」が6.0%、「どちらともいえない」が16.9%、「その他」が1.2%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図9は、「技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視していますか（オフシーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「全習法を重視した練習」が2.9%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が5.8%、「どちらかといえば分習法を重視した練習」が44.2%、「分習法を重視した練習」が41.3%、「どちらともいえない」が5.1%、「その他」が0.7%であった。J群は「全習法を重視した練習」が3.6%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が2.4%、「どちらかといえば分習法を重視した練

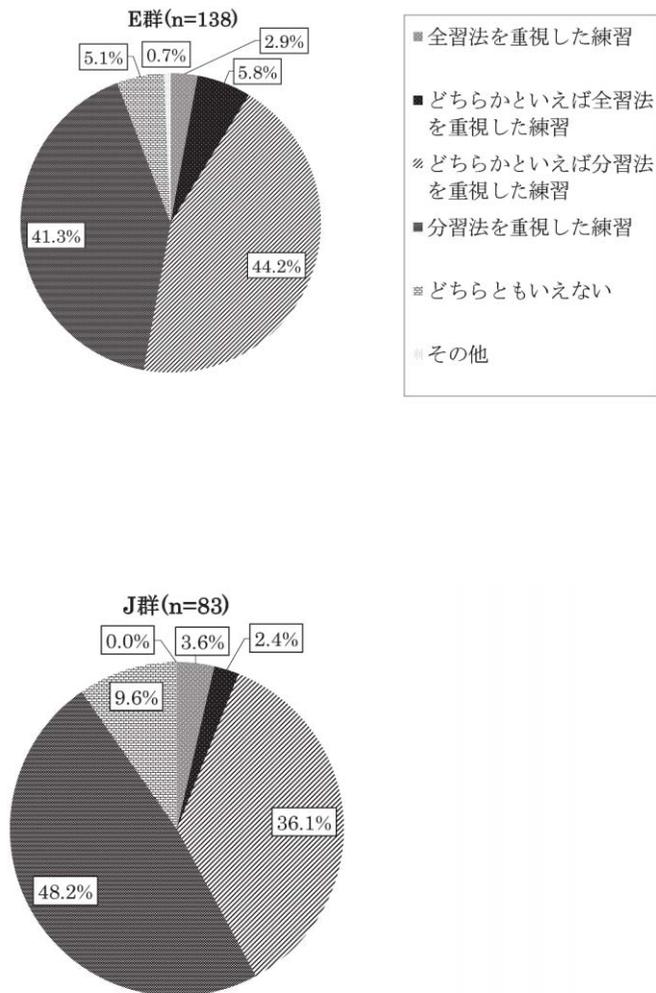


図9 技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視しているか（オフシーズン）

習」が36.1%、「分習法を重視した練習」が48.2%、「どちらともいえない」が9.6%、「その他」が0.0%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図10は、「技術と体力のどちらを重視した練習ですか（シーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「技術を重視した練習」が25.4%、「どちらかといえば技術を重視した練習」が58.7%、「どちらかといえば体力を重視した練習」が5.1%、「体力を重視した練習」が1.4%、「どちらともいえない」が8.0%、「その他」が1.4%であった。J群は「全習法を重視した練習」が22.6%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が60.7%、「どちらかといえば分習法を重視した練習」が4.8%、「分習法を重視した練習」が

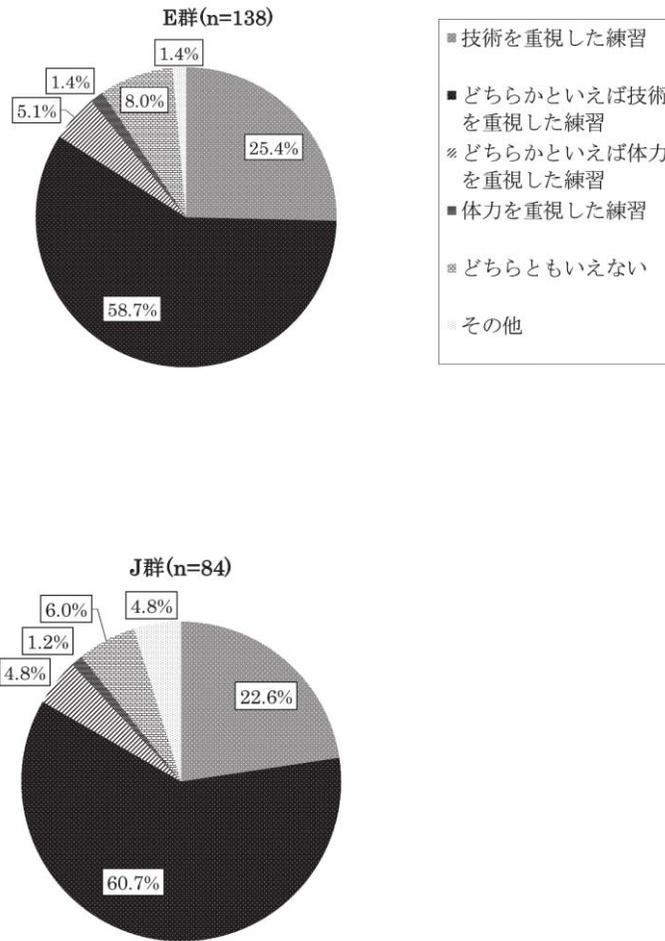


図10 技術と体力のどちらを重視した練習か（シーズン）

1.2%、「どちらともいえない」が6.0%、「その他」が4.8%であった。カイ 2 乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図11は、「技術と体力のどちらを重視した練習ですか（オフシーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「技術を重視した練習」が4.3%、「どちらかといえば技術を重視した練習」が8.7%、「どちらかといえば体力を重視した練習」が55.1%、「体力を重視した練習」が28.3%、「どちらともいえない」が2.9%、「その他」が0.7%であった。J群は「全習法を重視した練習」が2.4%、「どちらかといえば全習法を重視した練習」が6.0%、「どちらかといえば分習法を重視した練習」が66.7%、「分習法を重視した練習」が17.9%、「どちらともいえない」が6.0%、「その他」が1.2%であった。カイ 2 乗検定を

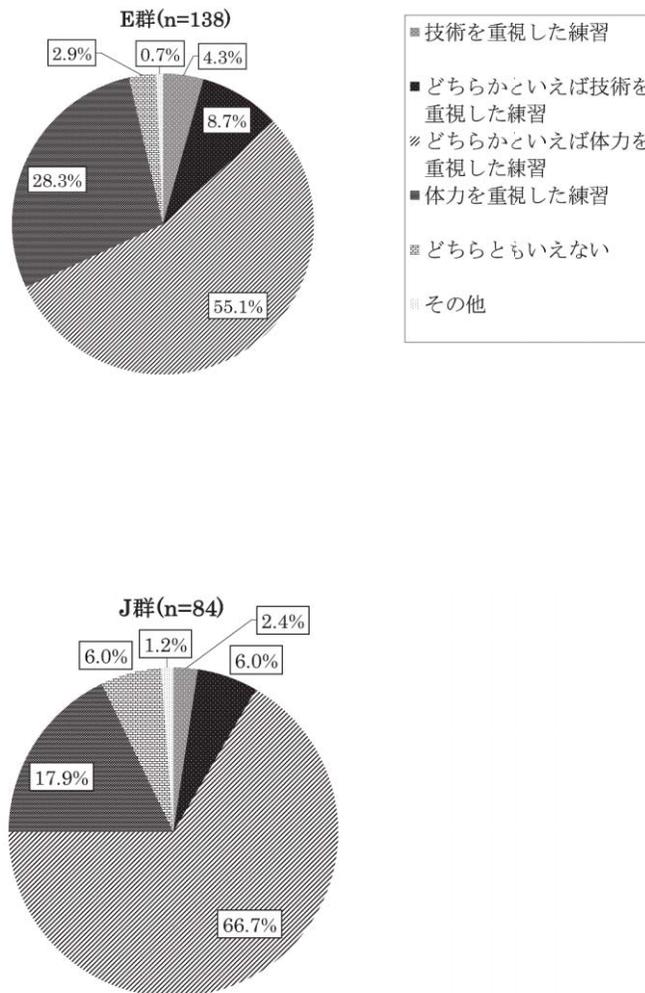


図11 技術と体力のどちらを重視した練習か（オフシーズン）

行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図12は、「技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習（体力づくり，補強）を行っていますか（シーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「十分行っている」が7.9%，「ある程度行っている」が51.8%，「少ししか行っていない」が36.7%，「全く行っていない」が3.6%，「その他」が0.0%であった。J群は「十分行っている」が11.9%，「ある程度行っている」が64.3%，「少ししか行っていない」が21.4%，「全く行っていない」が2.4%，「その他」が0.0%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

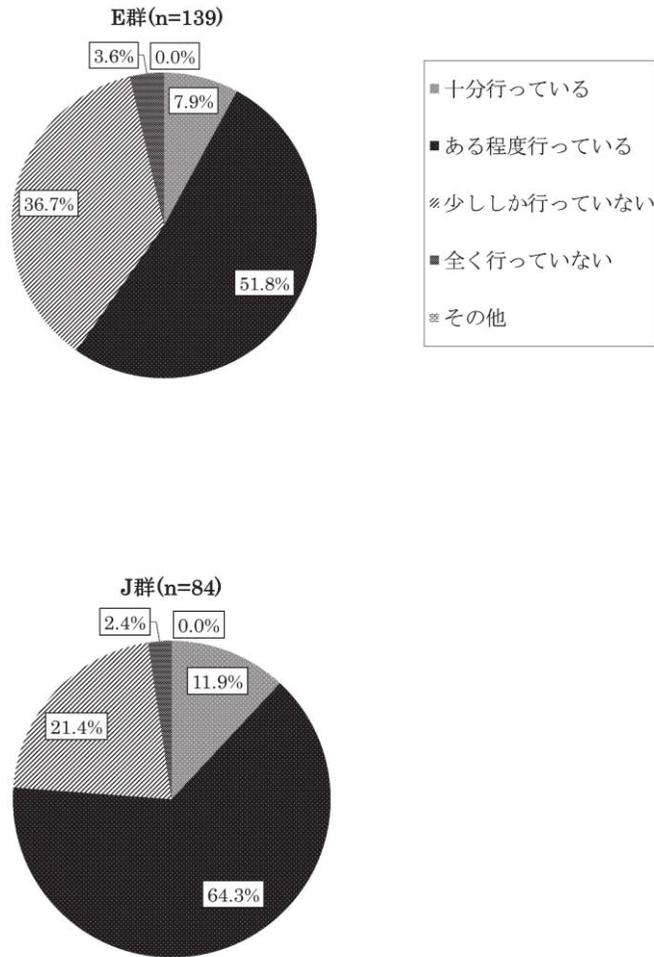
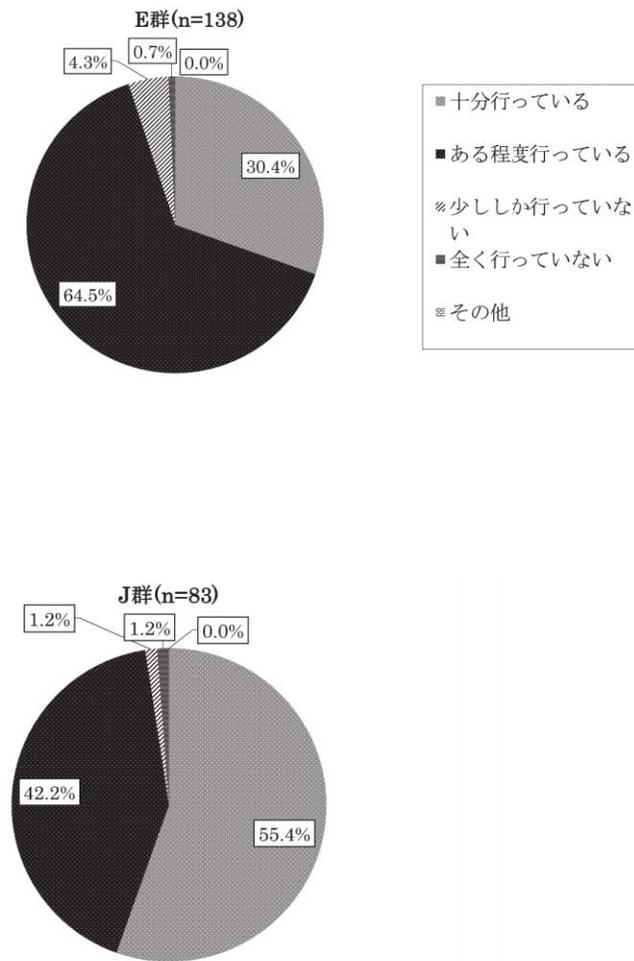


図12 技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習を行っているか（シーズン）

図13は、「技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習（体力づくり、補強）を行っていますか（オフシーズン）」という質問に対する回答を示したものである。E群は「十分行っている」が30.4%、「ある程度行っている」が64.5%、「少ししか行っていない」が4.3%、「全く行っていない」が0.7%、「その他」が0.0%であった。J群は「十分行っている」が55.4%、「ある程度行っている」が42.2%、「少ししか行っていない」が1.2%、「全く行っていない」が1.2%、「その他」が0.0%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

図14は、「体力づくりの練習では、ウェイトトレーニングを行っていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「十分行っている」が2.9%、「ある程度行っ



** : p<0.01

図13 技術の練習とは別に、体力そのものを高める練習を行っているか（オフシーズン）

ている」が8.6%、「少ししか行っていない」が22.3%、「全く行っていない」が66.2%、「その他」が0.0%であった。J群は「十分行っている」が6.0%、「ある程度行っている」が11.9%、「少ししか行っていない」が19.0%、「全く行っていない」が61.9%、「その他」が1.2%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

練習の設定について、両群間で大きな差はみられなかった。シーズン中は、E群、J群ともに技術の全体をまとめて行う練習である全習法によって多種多様な技術およびチーム戦術的な練習を実施する傾向にあり、直近の試合を想定した組織的な練習を数多く行っていることが考えられる。一方、オフシーズン中は、E群、J群ともに技術の一部を取り出

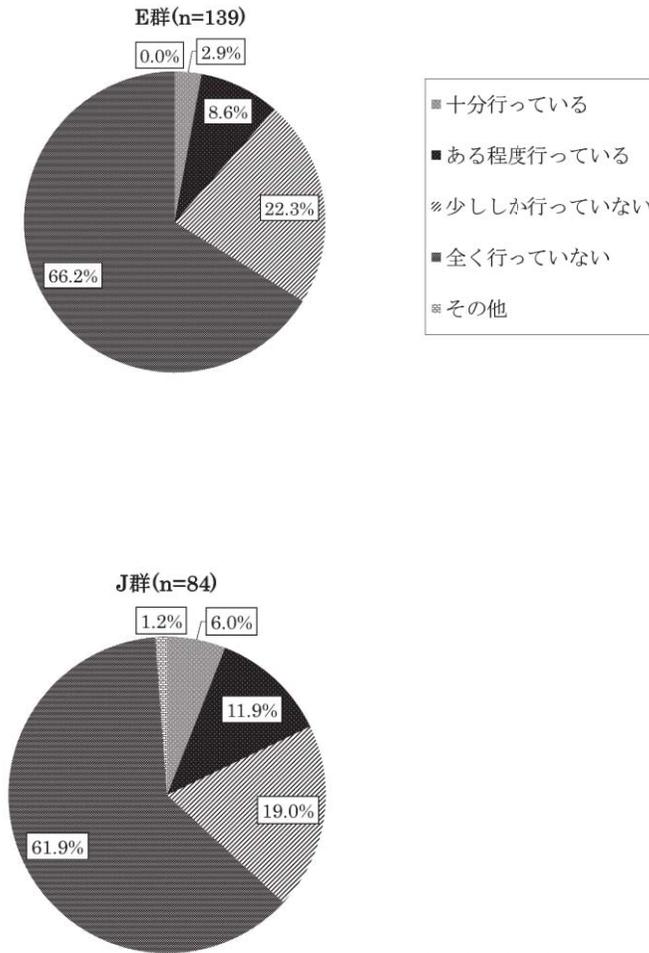


図14 体力づくりの練習では、ウエイトトレーニングを行っているか

して行う練習である分習法によって練習を実施しており、ほぼ毎回同じ練習内容を行っていることがわかった。これは、松田（2013）が指導書において「夏にしっかりとした野球をやるための体づくりであったり、必要な技術を身につけさせるための反復練習などは、毎日コツコツとやり続けたほうが体はしっかり覚える」と述べているように、大会までに時間的な余裕があるオフシーズンに、反復練習を中心に技術や体力の底上げを図ろうとしていることが背景にあるのだろう。オフシーズン中の練習について、阿保（2013）は、指導書において「チームがバラバラになってもいい、オフシーズン中は『個』の力を高める期間」と述べている。一方、遠藤（2007）は、指導書において当時甲子園大会で2連覇を果たした駒大苫小牧高校の練習方法を例に挙げ、「香田監督は、真冬に雪の上でノックを

した。駒大苫小牧高校の『非常識な』練習方法も、今では多くの高校が真似し始めている」と、全習法による練習を肯定的に述べている。このようにオフシーズン中の練習設定については、「個」のスキルを高めることに主眼を置いて分習法を多く用いる指導者と、「チーム力」を強化することに主眼を置いて全習法を多く用いる指導者に大別される。

本研究においてE群とJ群はともにオフシーズン中に分習法を多く用いる傾向がみられたことについて、両群の指導者が「個の力」の育成を図ったと推察されるが、研究対象とした北海道地区が積雪寒冷地であることも関係していると考えられる。オフシーズン中に積雪が多い北海道地区では、屋外でスペースを広く使った練習を行うことは難しいため、指導者が何を企図して練習設定を決定するかということ以前に、限られたスペースで分習法を用いた練習を行わざるを得ない状況があると考えられる。しかし、奈良（2009）は中学生年代で身につけるべき能力について「中学生の時期は戦術的な判断能力の深まりが期待できる年代であるので、効率よく戦術能力が身につくような練習方法を開発する必要性がある」と述べており、判断能力や戦術理解を高めるためには、個に特化しやすい分習法による練習ばかりではなく、判断や協調を伴う全習法を用いた練習も必要になると考えられる。全習法を用いた実践形式の練習では、プレーに関われない選手が多くなりやすいことを考慮したうえで、より効果的な導入方法を検討する必要があると考えられる。また、本研究で調査対象としている北海道地区のように、オフシーズンに全習法を実施することが難しい地域においては、分習法を行う中でも、単調な個人技術の反復にとどまらず、戦術理解や判断能力を向上させるような内容を組み込む必要があると考えられる。

技術練習と体力づくりについては両群間で大きな違いはみられなかった。E群、J群ともにシーズン中は技術を重視した練習を行い、オフシーズン中は体力を重視した練習を行っていることが明らかになった。シーズン中は試合が多いため、技術を重視した練習を多く行うことで、試合に向けた準備や対策を行っていると考えられる。一方、オフシーズン中に体力を重視した練習が多く行われていることについては、寒冷期に基礎体力を向上させることにより、技術に力強さを加えることや、長いシーズンをケガなく乗り越えるための持久力を養うことを狙いとしていると考えられる。このことについて、松田（2013）は「冬は目先の結果にとらわれずに本番の夏から逆算して取り組む」と述べている。一方で、原田（2014）は「練習は実戦、実戦は練習と意識させている」と述べており、オフシーズン中においても実戦練習を重視し常に選手に競争意識をもたせる指導者も存在する。そのような中で、オフシーズン中の練習において、両群ともに体力を重視している理由として、先述した北海道地区の気候条件も大きな影響を与えていると考えられる。濱田

(2006)が「北海道は冬が長く半年の間は野球の練習を行うことが難しい」と述べているように、積雪寒冷地の北海道ではボールを用いて練習することが難しい時期があるため、両群ともに一般的に体力的要素を重視しているのだろう。

しかし、倉俣(2001)が指導書で「小学生は技術的な成長、中学生は筋持久系、呼吸循環機能の成長、高校生は筋力の成長というのが一般的な発育パターンとして期待できる」と述べているように、小学生年代の子どもたちは神経系が著しく発達する時期であり、技術を身につけやすい年代であるため、オフシーズン中であっても、体力的要素以上に技術的要素を重視する必要があるのではないだろうか。西(2008)がサッカーのゴールデンエイジ期の技術指導について「一般的に、学習のための最高の年代と言われている。ゲームを通して基本の必要性を理解させ、ドリル(反復練習)により、サッカー選手として将来大きく成長するための基礎を選手に作る事が大切である。この時期には、プロが見せるような高度なテクニックを身につけることが可能で、一度習得したスキルは、大人になってからもずっと身につけている」と報告していることや、仁志(2015)が「野球においては小学生年代で多くのテクニックを身につけることが望ましい。ただし、筋力などが発達するのは、さらに先の年齢であるため、テクニックは身につけても、それに強さを求める必要はない」と述べていることから、小学生年代に対する技術指導の重要性が理解できる。本研究の結果において、E群とJ群がほぼ同様の割合で体力的要素を重視していたことは、オフシーズン中に行われているE群の技術練習が不足していることを示していると考えられる。

一方で、J群がオフシーズン中に体力的要素を重視していたことについては、発育・発達段階を考慮すると、適切な判断がなされていると考えられる。また、「技術練習とは別に体力そのものを高める練習を行っているか(オフシーズン)」という質問において、両群間で有意な差がみられた($p < 0.01$) ことについても同様に、適切な判断がなされていると考えられる。西(2008)はポスト・ゴールデンエイジ期にあたる中学生年代について「いわゆる思春期であり、急激な身体の成長により支点・力点・作用点に狂いを生じさせるため、新たな技術の習得や今までにできていたスキルが一時的にできなくなりアンバランスな状態になるものの、循環器系の機能が向上しやすい年代である」と述べており、技術トレーニングと並行して体力づくりに励むことは重要なことであると言えるだろう。また、野球は常に激しい動きをしているわけではなく、プレー間の時間が長く、プレーをしているだけで自然と体力が向上する競技ではないため、体力トレーニングの時間を技術練習の時間と別に設けていることは望ましいことだと考えられる。

(3) 活動の量について

図15は、「1週間に休養日は、何日ありますか」という質問に対する回答を示したものである。平均日数はE群が 3.0 ± 1.2 日、J群が 2.0 ± 1.5 日であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

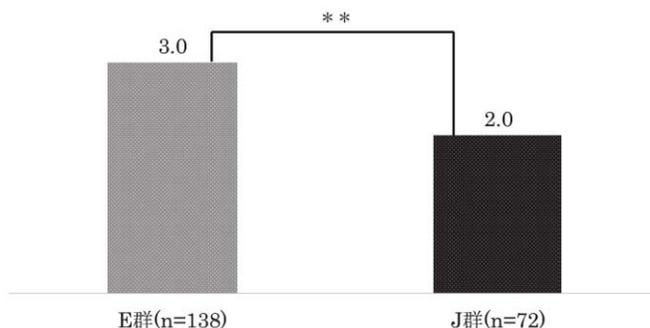


図15 1週間に休養日は何日あるか（日）

図16は、「1日の練習時間は、おおよそ何時間ですか。（シーズン期・平日）ただし、試合時間は除きます」という質問に対する回答を示したものである。平均時間はE群が 2.1 ± 1.2 時間、J群が 2.4 ± 1.2 時間であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

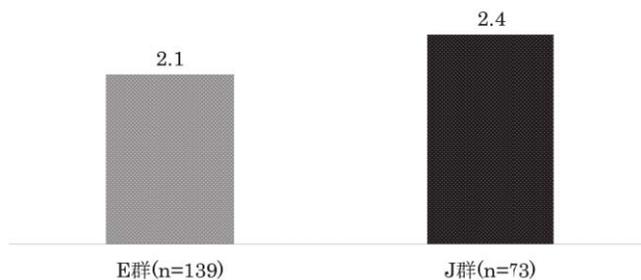


図16 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（シーズン・平日）（時間）

図17は、「1日の練習時間は、おおよそ何時間ですか。（シーズン期・休日）ただし、試合時間は除きます」という質問に対する回答を示したものである。平均時間はE群が 5.4 ± 2.0 時間、J群が 5.9 ± 1.7 時間であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

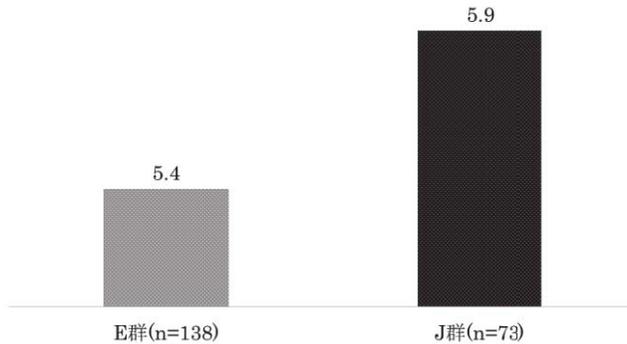


図17 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（シーズン・休日）（時間）

図18は、「1日の練習時間は、おおよそ何時間ですか（オフシーズン期・平日）ただし、試合時間は除きます」という質問に対する回答を示したものである。平均時間はE群が0.9±1.2時間、J群が2.1±1.1時間であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

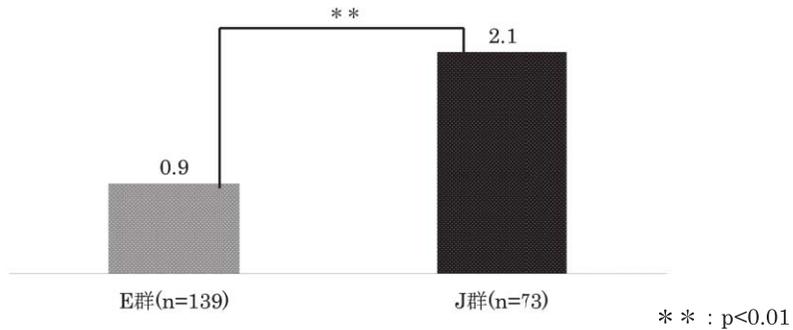
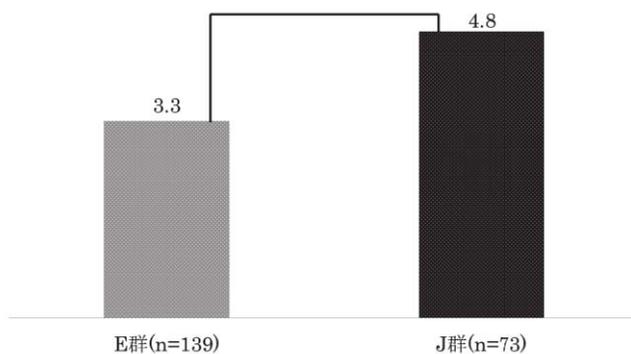


図18 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（オフシーズン・平日）（時間）

図19は、「1日の練習時間は、おおよそ何時間ですか（オフシーズン期・休日）ただし、試合時間は除きます」という質問に対する回答を示したものである。平均時間はE群が3.3±1.5時間、J群が4.8±1.8時間であり、t検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

図20は、「1週間の練習量についてはどのように考えていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「多過ぎる」が0.0%、「どちらかといえば多い」が7.1%、「丁度いい」が59.3%、「少な過ぎる」が12.1%、「どちらかといえば少ない」が20.0%、「その他」が1.4%であった。J群は「多過ぎる」が1.2%、「どちらかといえば多い」が11.9%、



** : p<0.01

図19 1日の練習時間は、おおよそ何時間か（オフシーズン・休日）（時間）

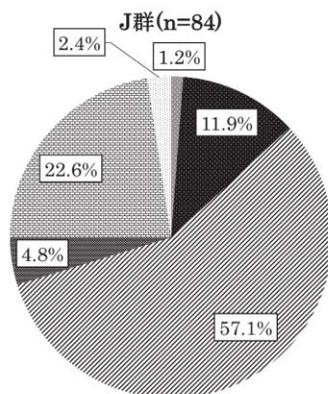
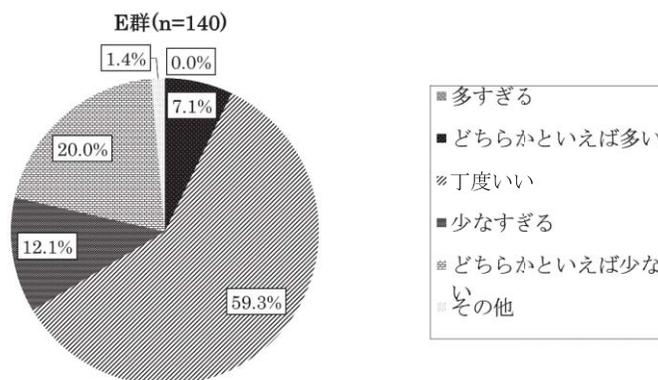


図20 1週間の練習量についての考え

「丁度いい」が57.1%，「少な過ぎる」が4.8%，「どちらかといえば少ない」が22.6%，「その他」が2.4%であった。カイ2乗検定を行った結果，両群間で有意な差がみられなかった。

図21は，「平日の練習量（拘束時間）についてはどのように考えていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「多過ぎる」が0.0%，「どちらかといえば多い」が1.5%，「丁度いい」が60.4%，「少な過ぎる」が17.9%，「どちらかといえば少ない」が17.9%，「その他」が2.2%であった。J群は「多過ぎる」が0.0%，「どちらかといえば多い」が5.1%，「丁度いい」が55.1%，「少な過ぎる」が11.5%，「どちらかといえば少ない」が24.4%，「その他」が3.8%であった。カイ2乗検定を行った結果，両群間で有意な差がみられなかった。

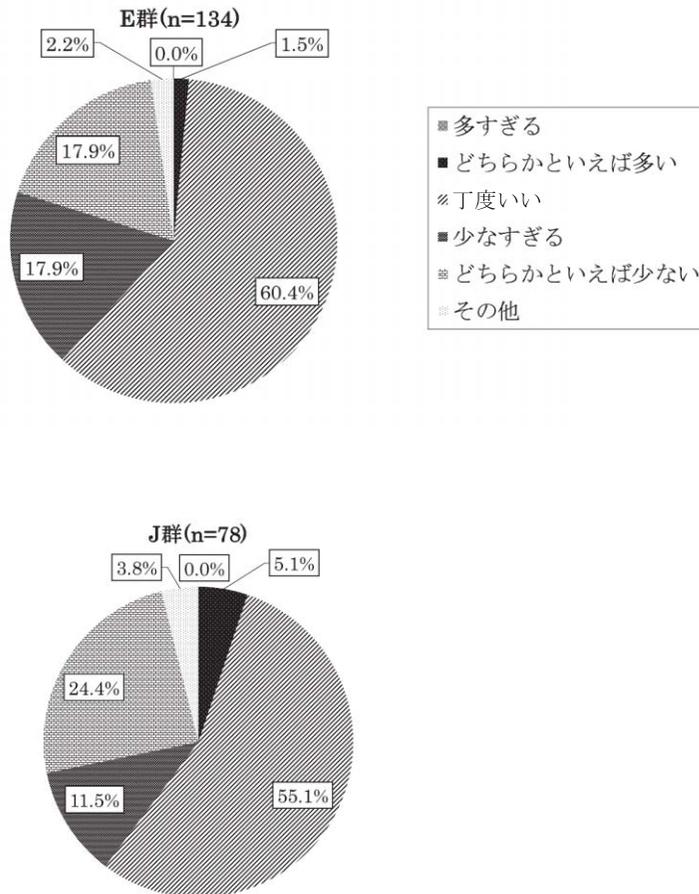


図21 平日の練習量についての考え

図22は、「休日の練習量（拘束時間）についてはどのように考えていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「多過ぎる」が0.7%、「どちらかといえば多い」が15.8%、「丁度いい」が70.5%、「少な過ぎる」が3.6%、「どちらかといえば少ない」が9.4%、「その他」が0.0%であった。J群は「多過ぎる」が0.0%、「どちらかといえば多い」が18.1%、「丁度いい」が67.5%、「少な過ぎる」が4.8%、「どちらかといえば少ない」が9.6%、「その他」が0.0%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

図23は、「大会は、1年間に何回ありますか」という質問に対する回答を示したものである。平均大会数はE群が16.8±8.3大会、J群が6.0±1.9大会であり、t検定を行った結

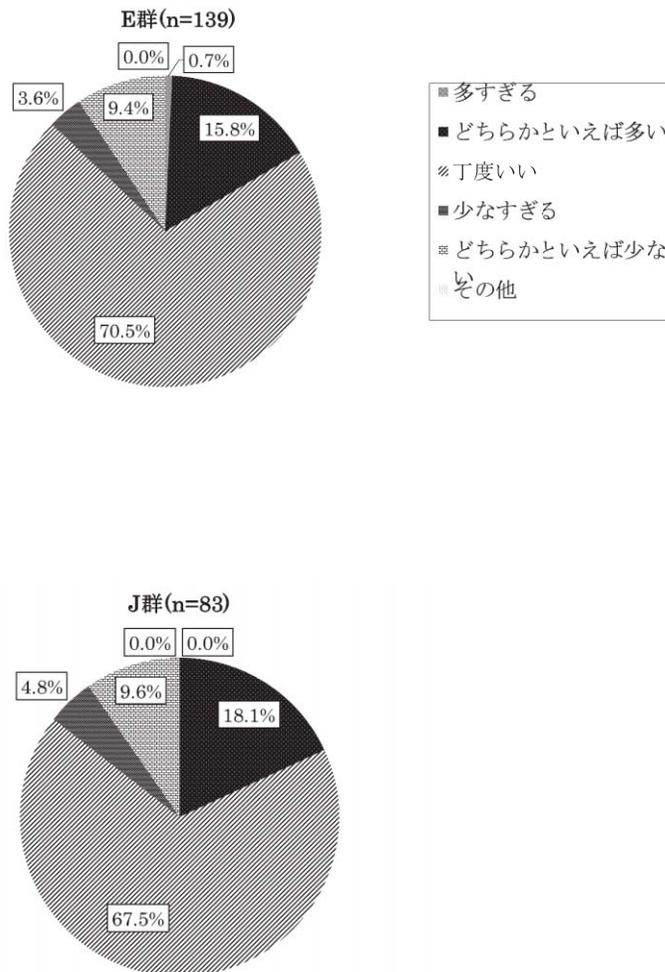


図22 休日の練習量についての考え

果，両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

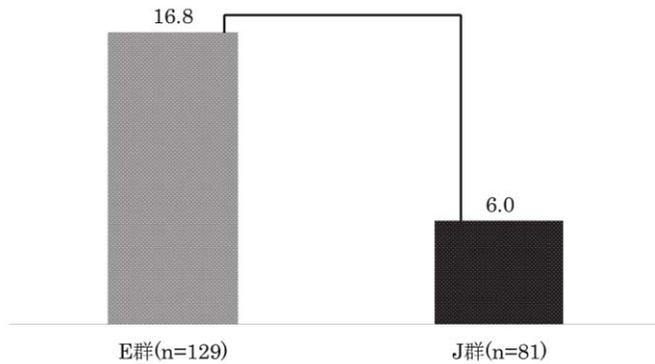


図23 大会は1年間に何回あるか (回)

図24は、「公式試合数は，1年間におおよそ何試合ですか」という質問に対する回答を示したものである。平均試合数はE群が 47.7 ± 28.0 試合，J群が 16.5 ± 9.1 試合であり， t 検定を行った結果，両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

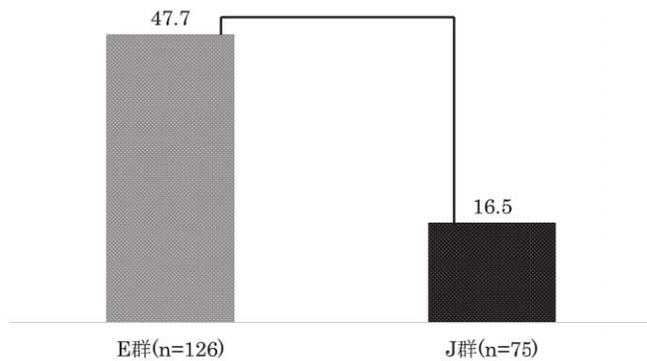


図24 公式試合数は1年間におおよそ何試合か (試合)

図25は、「練習試合は，1年間におおよそ何試合しますか」という質問に対する回答を示したものである。平均試合数はE群が 31.4 ± 24.1 試合，J群が 32.6 ± 31.3 試合であり， t 検定を行った結果，両群間で有意な差がみられなかった。

図26は、「大会の試合数についてはどのように考えていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「多過ぎる」が8.1%，「どちらかといえば多い」が34.6%，

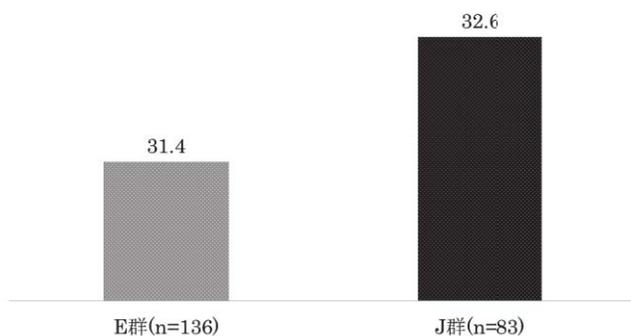
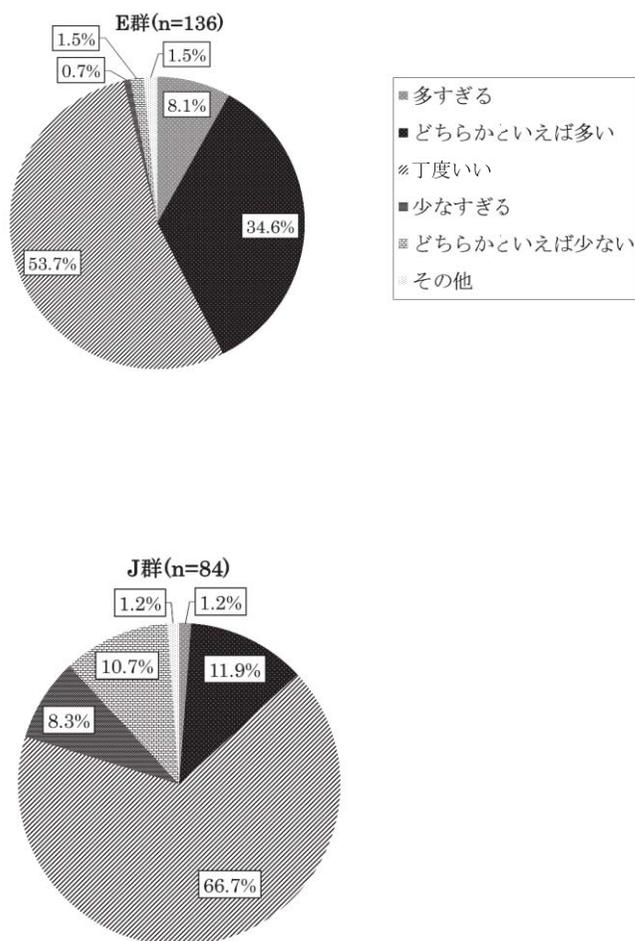


図25 練習試合は1年間におおよそ何試合するか（試合）



** : p<0.01

図26 公式試合数についての考え

「丁度いい」が53.7%、「少な過ぎる」が0.7%、「どちらかといえば少ない」が1.5%、「その他」が1.5%であった。J群は「多過ぎる」が1.2%、「どちらかといえば多い」が11.9%、「丁度いい」が66.7%、「少な過ぎる」が8.3%、「どちらかといえば少ない」が10.7%、「その他」が1.2%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられた ($p < 0.01$)。

図27は、「年間の練習試合数についてはどのように考えていますか」という質問に対する回答を示したものである。E群は「多過ぎる」が2.9%、「どちらかといえば多い」が10.1%、「丁度いい」が63.8%、「少な過ぎる」が5.8%、「どちらかといえば少ない」が16.7%、「その他」が0.7%であった。J群は「多過ぎる」が1.2%、「どちらかといえば多い」が7.1%、「丁度いい」が66.7%、「少な過ぎる」が8.3%、「どちらかといえば少ない」

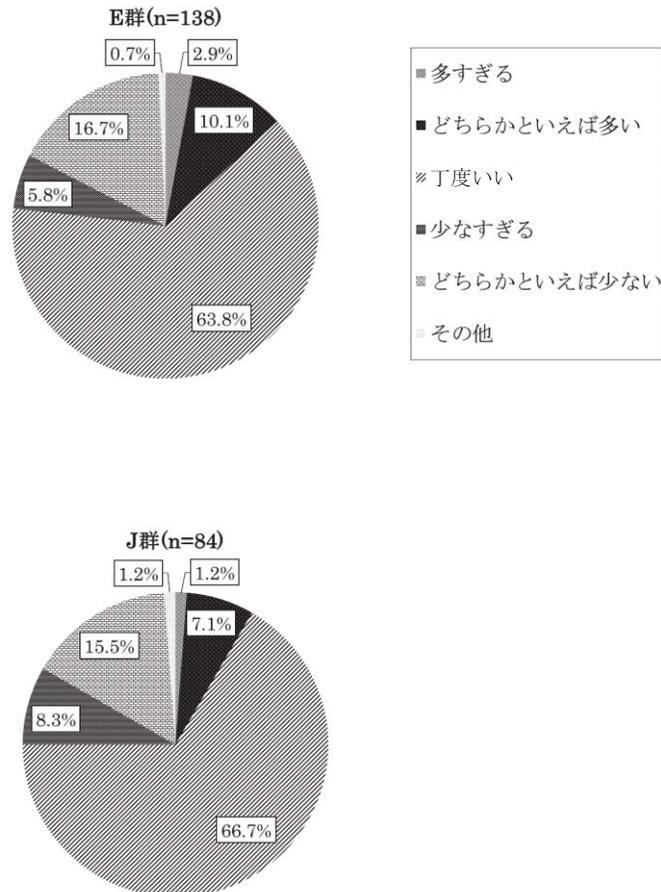


図27 練習試合数についての考え

が15.5%、「その他」が1.2%であった。カイ2乗検定を行った結果、両群間で有意な差がみられなかった。

シーズン中における平日および休日の練習時間については、両群間で差はみられず、休日の練習時間は共におよそ半日で終了していることが明らかになった。シーズン中における一日の練習時間に差はみられなかったものの、休養日についてはE群が有意に多かった ($p < 0.01$)。先述したとおり、E群はボランティアで指導に携わっている者が多いため、仕事の都合上練習を行えない日数が増えるのは当然の結果であるといえる。しかし、小学生年代が平日に練習量を確保できないからといって、休日に中学生年代と同等の約6時間も練習を行うことは、公益財団法人全日本軟式野球連盟（2015）が「練習日数と時間については、小学生では、週3日以内、1日2時間を超えないこと、中学生・高校生においては、週1日以上休養日をとること。個々の選手の成長、体力と技術に応じた練習量と内容が望ましい」と述べていることや、西（2008）が、プレゴールデンエイジ期にあたる小学生年代について「ひとつの物事への集中は長く続かず、絶えず行動が変わるため、長時間にわたる連続的なトレーニングは困難である」と述べていることから、練習量が多過ぎることによる障害の発生が懸念される。

一方で、オフシーズン中の平日および休日の練習時間についてはJ群の方が有意に長く ($p < 0.01$) なり、E群の活動量が減少していることが明らかになった。両群ともに北海道における冬季の環境によって、ボールの使用が困難になり、シーズン中に比べて練習量は減少したのだろう。そのような状況下で、J群の練習時間がE群よりも長くなったことについては、気候に左右されにくい体力トレーニングをE群よりも積極的に取り入れていることが要因として考えられる。オフシーズン中でE群の練習時間が短くなったことについて、技術を習得しやすい時期に適切な練習量を確保できていないという見方もできるが、宍戸（2013）はアメリカスポーツ界で採用されているシーズン制の利点について「一年中同じスポーツを続けているより楽しく、何よりも運動神経に幅が出る」と述べており、小学生年代では一つの種目に特化し過ぎることなく、様々な種目を幅広く経験することが重要であるという考え方が存在する。北海道地区では冬季になると、積雪の影響により屋外で野球を行うことは難しくなるが、スキーやスケートなどを行いやすくなるため、幅広い運動経験が期待できる。そのため、オフシーズン中でE群の練習量が減少したことについては、必ずしも練習量の不足を示すものではないと考えられる。

大会数や公式試合数についてはE群がJ群よりも有意に多かった ($p < 0.01$) が、練習試合数は両群間で差はみられなかった。積雪寒冷地の北海道では実戦的な練習を行える期間

が他の地域と比べて短いため、シーズン中により多く試合経験を積ませたいという狙いによって試合数が多くなったものと推察できるが、E群の大会数や公式試合数がJ群以上に多くなっていることについては懸念が残る。試合数が多いことにより、経験は増えるものの、試合では勝負に対するこだわりが生じるため、無理な動作を誘発し、野球肩や野球肘などのスポーツ障害につながりかねない。馬見塚(2012)は「小学校5年生の約半数は肘の障害の痕がエコーで確認されると指摘し、ライセンス制度導入により指導者が一定レベルの医学的知識を持つことが必要である」と報告している。また、武藤(1986)は「野球肘の予防対策という点では、練習方法、そして子どものスポーツのあり方を改めることの方がはるかに重要である」と報告しており、小学生年代の試合数については検討する必要があると考えられる。また、E群は大会数および公式試合数がJ群よりも有意に多かったにも関わらず、「大会や試合数についての考え」では、大半が「丁度いい」と回答していた。さらにE群は、大会数や公式試合数がJ群を上回っているにも関わらず、練習試合をJ群と同程度行っており、その数についても大半が「丁度いい」と回答していた。E群の試合数と、試合数に対する考え方は、小学生年代の子どもたちの発育・発達段階を考慮しているとは言い難く、大いに検討の余地があると言えるだろう。

4. 結 論

- ①指導者のプレーヤー経験において高校以下が大半であったE群と大学以上が大半であったJ群とでは、指導力にも差が生じている可能性がある。
- ②オフシーズン中においてJ群の練習が分習法に偏っていたことについて、工夫の余地がある。
- ③オフシーズン中においてE群の技術練習が不足している可能性がある。
- ④オフシーズン中においてJ群が体力的要素を重視していたことについては、発育・発達段階を考慮すると、適切な判断がなされていると考えられ、さらにJ群が体力トレーニングの時間を技術練習の時間と別に設けていることは望ましいことだと考えられる。
- ⑤シーズン中の休日においてE群の練習量が多過ぎることにより、障害の発生が懸念される。
- ⑥オフシーズン中においてE群の練習量が減少したことについては、必ずしも練習量の不足を示すものではないと考えられる。
- ⑦E群の大会数および試合数は非常に多く、小学生年代の発育・発達段階を考慮している

とは言い難く、大いに検討の余地があると考えられる。

活動内容について、オフシーズン中の練習設定においてJ群は分習法を行う中でも、単調な個人技術の反復にとどまらず、戦術理解や判断能力を向上させるような内容を組み込む工夫が必要であろう。また、オフシーズン中の技術練習と体力づくりのバランスについて、E群は技術練習の割合を増加させたい。小学生年代は一般的に「即座の習得」が可能な時期であるため、多くのテクニックを身につける技術練習を行う必要があると考えられる。

活動量について、シーズン中の休日における練習ではE群の練習量を減少させたい。平日の練習量が少ないものの休日に中学生年代と同等の約6時間もの練習を行うことは、集中力の低下によるケガや練習量が多過ぎることで身体への負担が大きくなり、障害の発生が懸念される。そのため練習ではできるだけ楽しみながら飽きさせない工夫をした上で、小学生年代の子どもたちの集中力の続く範囲で練習を行っていくのが望ましい。また、練習で野球が上手くなることも大切であるが、少子化や野球人気の低迷といった面で野球人口が減少している昨今の野球界の問題を考えると小学生年代の子どもたちに「野球が楽しくてたまらない」といった感情を抱かせるような環境づくりが必要であると考えられる。大会や試合についても、身体への負担を考慮し、ケガや障害の発生がなく野球の楽しさを体感できる適切な数を検討する必要があると考えられる。

指導者の最終野球歴について、プレーヤー経験において高校以下が大半であったE群と大学以上が大半であったJ群とでは、指導力にも差が生じている可能性があるため、指導者講習を行い、指導者資格取得を義務化するシステムの構築が必要であると考えられる。指導者講習については、発育・発達段階に応じた指導という観点で行う必要があるが、現在の野球界には一貫指導プログラムが存在しないため、一貫指導プログラムの構築が急務であると考えられる。

本研究では、ジュニアスポーツにおける指導の現状をアマチュア野球におけるジュニア期指導に焦点をあて、北海道地区の指導の実態に着目して調査を行ったため、日本各地域で行われているものについては明らかではない。よって、一貫指導プログラムを構築するためには、各地方の現状について調査し各地域の環境や慣習を踏まえ、他競技の一貫指導プログラムの現状についても比較検討した上で、子どもたちの発育・発達段階に合わせた一貫性のある指導プログラムを考案することが今後の研究課題である。

参 考 文 献

- 阿保暢彦 (2013) オフに取り組むべきメニュー ベースボールクリニック12月号 ベースボールマガジン社：東京，pp22-25
- 池田克紀 (1975) アメリカにおけるシーズン制—冬季スポーツとシーズン制— 体育の科学 25(11)：726-729
- 石井忠道 (2003) 中学野球の指導とノウハウ (第1版) ベースボールマガジン社：東京，pp8-123
- 入江直矢 (2012) どのようにしてプロ野球の人気が回復するのか 平成24年度文教大学情報学部経営情報学科 卒業論文
- 入江容，下井俊典，丸山仁司 (2013) 中学生野球部員に対する障害予防を目的としたアンケート調査とコンディショニング指導効果 理学療法科学28(3)：343-346
- 岩上貴紀 (2014) 野球における指導者養成の課題について—指導者の意識に着目して— 平成25年度筑波大学大学院人間総合科学研究科 修士論文
- 植屋清見，内藤浩正 (1990) 野球スポーツ少年団団員の体力・運動能力・投能力の発達とその望ましい指導のあり方の検討 日本体育学会大会号 (41B)：464
- 植屋清見，中村和彦 (1991) 少年スポーツの実態に関する体力科学的研究(2)—野球少年団の活動のあり方について— 体力科学40(4)：425
- 内田勇人，橋口剛夫，諸富嘉男，小川幸三，上平雅史 (1987) 野球練習が心身に及ぼす影響 日本体育学会大会号 (38B)：827
- 江藤省三 (2011) 考える力を伸ばす！ジュニア野球「打撃・走塁」練習メニュー150 池田書店：東京，p2
- 遠藤友彦 (2007) できる！やれる！勝てる！考える野球 無双舎：東京，p32-33
- 岡崎壮之 (2009) 野球愛好児への指導 臨床スポーツ医学 Vol.26, No.6：723-728
- 小俣よしのぶ (2010) 野球①～国内におけるタレント発掘・育成の現状～ 「コーチング・クリニック (2010年1月号)」ベースボールマガジン社：東京，pp46-51
- 柏口新二 (1994) 小児科診療 健康とスポーツ 子どもと野球，診断と治療社2157-2162
- 河崎賢三 (2012) 少年野球指導者論 I—現在の少年野球チームおよび指導者の現状と問題点，課題 Sports Medicine 24(9)：39-41 Book House HD
- 兼屋辰吾 (2012) 中学校軟式野球における指導の現状について—選手のアンケートから— 平成23年度筑波大学大学院人間総合科学研究科 修士論文
- 川村卓，島田一志，阿江通良 (2001) 熟練野球選手の打撃動作における両手の動きについて 大学体育研究 23：17-28
- 川村卓 (2015) 監督・コーチ養成講座 洋泉社：東京，pp12-237
- 岐部和正 (2008) キューバ野球における一貫性指導の構築，運営に関する研究 平成19年度筑波大学大学院体育研究科 修士論文
- Kleindienst, Viola K. and Arther Weston (1964) Intramural and Recreation Programs for Schools and Colleges. New York: Appleton Century Crofts：559
- 倉俣徹 (2001) 中学生へのコーチング ベースボールクリニック 9月号 ベースボールマガジン社：東京，pp22-25
- 公益財団法人全日本軟式野球連盟 HP <http://jsbb.or.jp/rules/rule>
- 児玉公正，志水正俊，川合悟，田原武彦 (1993) 少年野球選手の体格・体力特性第二報～体力と野球運動能力～ 日本体育学会大会号 (44B)：686
- 古山昇平 (2011) 大学野球選手における少年期の技能習得要因について 平成22年度筑波大学大学院人間総合科学研究科 修士論文
- The National Collegiate Athletic Association, NCAA of Manual, 1974
- 穴戸博昭 (2013) 週刊 TURNOVER

- <http://www.47news.jp/sports/turnover/column/shishido/132714.html>
- ジーコ（1993）ジーコのリーダー論 ごま書房：東京，34-35
- 関岡甲太（2004）少年野球指導における望ましい指導・運営に関する一考察～指導者・保護者・子供の意識の比較～ 筑波大学体育研究科研究論文集（27）229-232
- 棚山研（1995）少年野球の危機と指導意識—大阪・千里ニュータウンを事例として— 立命館産業社会論集 31(2)：51-69
- 田原武彦，川合悟，志水正俊，児玉公正（1993）少年野球選手の体格・体力特性第一報～全国平均値との比較～ 日本体育学会大会号（44B）：685
- 中村和彦，植屋清見（1991）少年スポーツの実態に関する体力科学的研究(1)—野球少年団団員の形態・体力・運動能力・投動作の発育・発達特性に関して— 体力科学 40(4)：424-425
- 奈良隆章（2009）大学野球選手における中学時代の競技環境の違いが自己の技能に与えた影響について～中学校部活動と硬式クラブの比較から～ スポーツコーチング研究第7巻：12-25
- 仁志敏久（2015）ジュニア野球 教えて上手くなる練習メニュー 池田書店：東京，pp32-33
- 西政治（2008）日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題 京都学園大学経営学部論集(8) 1：173-196
- 原朗，榎本至（2005）水球競技の長期一貫指導型競技者育成プログラム 東京情報大学研究論集 Vol.9 No.1：21-33
- 原田英彦（2014）日本経済新聞 HP
<http://www.nikkei.com/article/DGXZZO71547820R20C14A5000000/>
- 濱田康行（2006）北海道の野球はなぜ強いのか 信用組合，53(11)：2-3
- 平井孝治（2015）大学野球における打撃力の向上に関する研究～打撃成績上位者および下位者の比較～ 平成26年度筑波大学体育専門学群 卒業論文
- 福田和夫（1983）硬式野球と軟式野球の違いに関する一考察 日本体育学会大会号（34）：627
- 藤原誠 堺賢治（1989）スポーツ少年団の指導に関する研究 愛媛大学教育学部紀要：67-75
- 船越忠直 末永直樹ほか（2001）北海道における少年野球の実態 日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.9 No.3：347-352
- 本間正夫（2006）絶対うまくなる少年野球投手・野手編 実業之日本社：東京，pp159-160
- 松田忍（2013）オフに取り組みべきメニュー ベースボールクリニック12月号 ベースボールマガジン社：東京，pp26-29
- 馬見塚尚孝（2012）少年の野球肘予防への提言—全力投球禁止，投球強度制限，盗塁禁止，指導者ライセンス Sports Medicine No.145：14-21. Book House HD
- 馬見塚尚孝（2012）野球医学の教科書 ベースボールマガジン社：東京，pp52-53
- 宮内孝知（1979）現代の子どもをめぐる問題と体育とスポーツ—リトルリーグ野球の調査から— 日本体育学会大会号（30）：695
- 武藤芳照（1986）野球肘の実態と発生原因 日本体育学会大会号（37B）：528
- 森下常一，谷口良樹，市川宣恭（1985）中学生野球部員における肘関節障害の実態 体力科学 34(6)：593
- 横井康博，守能信次（1996）高校野球指導者が認識する高校野球の価値と問題性に関する一考察 日本体育学会大会号（47）：163

資料（本調査用紙）

野球指導に関するアンケート調査

このアンケートは、すべてのアマチュア野球の指導者を対象にしております。研究テーマは、「ジュニア期スポーツ（野球）の指導方法とその環境」です。野球界発展のためにと考えております。お忙しいことは存じますが、ご協力をお願い申し上げます。

なお、このアンケートは本テーマの調査についてのみ取り扱われます。このアンケートの結果を公表する際に個人が特定されたりすることはありません。また、この調査の参加への意思はこのアンケートの記入をもって示されたとしますので、すべて書かなかったり、途中で取りやめたりしても問題はなりません。

近畿大学 教授 大島 寛
トヨタ自動車東日本 大島 建
和歌山大学 大島 安奈

アンケート記入上のお願い

質問の多くは、答えが用意されています。当てはまる記号に、○を書いてください。なお、答えのなかには、「その他」のあるものがあります。「その他」を選んだ場合には（ ）内にその内容を簡単に書いてください。簡条書きでもかまいません。

Q 1. あなたの年齢をお答えください。

（ ） 歳

Q 2. あなたの職業をお答えください。

- a. 自営業 b. サラリーマン c. 公務員 d. 教員 e. 学校の職員
f. 市町村のスポーツ指導者 g. 企業スポーツクラブの指導者
h. その他（ ）

Q 3. 自身の野球経験についてお答えください。

- 1) プレーヤー（選手）としての経験年数
（ ） 年
- 2) 現役最後のステージについて当てはまるものに○をしてください。
a. 小学校 b. 中学校 c. 高校野球 d. 大学野球 e. 社会人野球
f. プロ野球
- 3) 主にどのポジションを経験しましたか。（当てはまるものすべてに○をしてください）
a. 投手 b. 捕手 c. 内野手 d. 外野手

Q 4. 指導者としての経験年数

（ ） 年

Q 5. 現在、指導している選手の年齢と人数を男女別にお知らせください。また、下部組織チームがありましたら、その人数もご記入ください。

Top チーム（ ） 歳～ ） 歳、 名・男子 名、女子 名）
下部チーム（ ） 歳～ ） 歳、 名・男子 名、女子 名）

Q 6. チームの所属連盟を記入してください。

()

※中学校は中体連、高校は高野連

Q 7. チームの主な目的・目標はなんですか。優先順位をつけてお願いします。

- a. 良い成績を上げること b. 技術の向上 c. 健康, 体力づくり
d. 根性づくり e. 仲間づくり f. 野球で進学 g. 人格形成
h. その他 ()

1位 () 2位 () 3位 () 4位 () 5位 ()

Q 8. チームのスタッフについて、わかる範囲で結構ですので、ご記入ください。

※例 代表1名 事務局2名 監督1名 コーチ3名 トレーナー1名 責任教師 顧問 など

--

Q 9. チームの資金援助について、ご記入ください。 ※複数○可

- a. 部費・月謝 b. 父母会 c. 学校生徒会 d. 学校の強化費 e. 後援会
f. 基金 g. 行政からの助成 h. その他 ()

Q10. 差し支えなければ部費・月謝の金額を教えてください。

(年 or 月 /) 円)

Q11. チームに専属のトレーナーはいますか。

- a. いる b. いない

Q12. Q11で2)と回答されたチームに質問です。トレーナー不在の理由をお答えください。

- a. 経済的な理由 b. 適任者がいない c. 必要と思わない d. 選手任せ
e. その他 ()

Q13. 専用グラウンドは、ありますか。

- a. ある (Q14に進んでください) b. ない (Q20に進んでください)

Q14. グラウンドはどここのグラウンドですか。

- a. 小学校のG (グラウンド) b. 中学校のG c. 高校のG d. 大学のG
e. 公営のG f. 企業のG g. 私有地 h. その他 ()

Q15. そのグラウンドを使用するために料金は必要ですか。

- a. はい (金額/月 円) b. いいえ

Q16. チームとして、そのグラウンドでの練習は週に何日ですか。

(日)

Q17. チームとして、そのグラウンド以外での練習は週に何日ですか。

(日)

Q18. 一週間に休養日は、何日ありますか。
(日)

Q19. 一日の練習時間は、おおよそ何時間ですか。ただし、試合時間は除きます。
試合期・シーズン中(平日 時間)(土/日/休 時間)
鍛錬期・オフシーズン中(平日 時間)(土/日/休 時間)

Q20. Q13でbと回答した方に質問です。グランドの確保にどんな御苦勞がありますか。
具体的にご記入ください。箇条書きで結構です。

ご苦勞例)

Q21. 1週間の練習計画はありますか。
a. 詳しいものがある b. 簡単なものがある c. ない d. その他 ()

Q22. 1週間の練習量についてはどのように考えていますか。
a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他 ()

Q23. 毎回の練習計画はありますか。
1) a. 詳しいものがある b. 簡単なものがある c. ない d. その他 ()
2) その日の練習内容は、スタッフで共有しますか。
a. する b. しない
3) その日の練習内容は、事前に選手に伝えますか。
a. 伝える b. 伝えない

Q24. 平日の練習量(拘束時間)についてはどのように考えていますか。
a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他 ()

Q25. 休日の練習量(拘束時間)についてはどのように考えていますか。
a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他 ()

Q26. 練習試合は、1年間におおよそ何試合しますか。
(1年間に 試合)

Q27. シーズン(試合を基準に)は何月から何月までですか。
(月～ 月)

Q28. シーズン・オフ(ボールを握らない時)はありますか?それは何月から何月までですか?
a. ある b. ない (月～ 月の ヶ月)

- Q29. 年間/月間の練習試合数についてはどのように考えていますか。
a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他（ ）
- Q30. 大会は、1年間に何回、公式試合数はおおよそ何試合ですか。
（1年間に 回、試合数 試合）
- Q31. 大会の試合数についてはどのように考えていますか。
a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他（ ）
- 〈コーチング・指導、その他運営について〉
- Q32. 入部時、または定期的にプレーヤーのメディカルチェックをしますか。
a. ある b. ない
- Q33. 入部時、体力測定または技術テストをしますか。
a. ある b. ない
- Q34. 入部時、保護者面接をしますか。
a. ある b. ない
- Q35. あなたの指導の重点を記入してください。
a. 選手の長所を伸ばす b. どちらかといえば長所を伸ばす
c. どちらでもない d. どちらかといえば短所を直す e. 短所を矯正する
f. その他（ ）
- Q36. あなたの指導の重点を記入してください。※複数○可
a. 技術・戦術 b. 体力 c. 精神力 d. 生活 e. 食育
f. 用具、グラウンドの手入れ g. チームワーク h. その他（ ）
- Q37. 理想とする技術・戦術（目標とする技術・戦術）や練習方法は、何から学びますか。
※複数○可
a. 自らの経験 b. 指導書、雑誌 c. 映像（ビデオ、DVD）
d. 優秀な選手の観察 e. 指導者の話 f. 競技団体などが主催する研修会
g. その他（ ）
- Q38. 理想とする技術・戦術（目標とする技術・戦術）は、明確になっていますか。※複数○可
a. 明確になっている b. だいぶ明確になっている c. それほど明確になっていない
d. 明確になっていない e. その他（ ）
- Q39. 理想とする体力（目標とする体力）や体力づくりの練習方法は、何から学びますか。
a. 自らの経験 b. 指導書、雑誌 c. 映像（ビデオ、DVD）
d. 優秀な選手の観察 e. 指導者の話 f. 競技団体などが主催する研修会
g. その他（ ）
- Q40. 理想とする体力（目標とする体力）は、明確になっていますか。
a. 明確になっている b. だいぶ明確になっている c. それほど明確になっていない
d. 明確になっていない e. その他（ ）

- Q41. その体力要因は、何ですか。特に、重要なものを選んでください。 ※複数○可
- a. 筋力（大きな力を出す能力）
 - b. パワー（敏捷に、瞬発的に運動を行うことができる能力）
 - c. 無氣的持久力（酸素をとらないで運動を続けて行うことができる能力）
 - d. 有氣的持久力（酸素をとりながら運動を続けて行うことができる能力）
 - e. 柔軟性（体の柔らかさ）
 - f. 調整力（器用に運動を行うことができる能力）
 - g. 体力は特に必要ではない
 - h. 不明
 - i. その他（ ）

〈 練習内容 〉

1 週間の練習内容についてお尋ねします。

- Q42. シーズン（試合期）
- a. 毎日同じ練習内容
 - b. ほぼ毎日同じ練習内容
 - c. 曜日によって異なる練習内容
 - d. その他（ ）
- Q43. オフシーズン（鍛錬期）
- a. 毎日同じ練習内容
 - b. ほぼ毎日同じ練習内容
 - c. 曜日によって異なる練習内容
 - d. その他（ ）

技術と体力のどちらを重視した練習ですか。

- Q44. シーズン（試合期）
- a. 技術を重視した練習
 - b. どちらかといえば技術を重視した練習
 - c. どちらかといえば体力を重視した練習
 - d. 体力を重視した練習
 - e. どちらともいえない
 - f. その他（ ）
- Q45. オフシーズン（鍛錬期）
- a. 技術を重視した練習
 - b. どちらかといえば技術を重視した練習
 - c. どちらかといえば体力を重視した練習
 - d. 体力を重視した練習
 - e. どちらともいえない
 - f. その他（ ）

技術練習では、全習法と分習法のどちらの練習法を重視していますか。

全習法（技術の全体をまとめて行う練習法・練習試合やゲーム形式）

分習法（技術の一部を取り出して行う練習法・スイング、ティー、ノックなど）

- Q46. シーズン（試合期）
- a. 全習法を重視した練習
 - b. どちらかといえば全習法を重視した練習
 - c. どちらかといえば分習法を重視した練習
 - d. 分習法を重視した練習

d. 全く行っていない e. その他 ()

Q57. 体力づくりの練習では、技術に役立つような動きを用いることにも注意をしていますか。

a. 十分行っている b. ある程度行っている c. ほとんど行っていない
d. 全く行っていない e. その他 ()

Q58. 体力づくりの練習では、ウエイトトレーニングを行っていますか。

a. 十分行っている b. ある程度行っている c. 少ししか行っていない
d. 全く行っていない e. その他 ()

Q59. ウエイトトレーニングの指導は、誰が行っていますか。

a. 専門家 b. 監督 c. コーチ d. その他 ()

体力づくりの練習量についてはどのように考えていますか。

Q60. シーズン（試合期）

a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他 ()

Q61. オフシーズン（鍛錬期）

a. 多過ぎる b. どちらかといえば多い c. 丁度いい d. 少な過ぎる
e. どちらかといえば少ない f. その他 ()

Q62. 体力測定を定期的に行っていますか。

a. 行っていない b. 1年に1, 2回行っている c. 1年に3, 4回行っている
d. 1年に5, 6回行っている e. その他 ()

Q63. 体力測定を行っている方は、測定項目を書き入れてください。

() () ()
() () ()

Q64. 身体の調子を知るために、毎日あるいは1週間に数回測定しているものはありますか。

a. ある b. ない

Q65. Q64でaと回答した方に質問です、その測定項目を書いてください。

() () ()

Q66. あなたは練習の中、選手に創意工夫（考える）の時間を設けていますか。

a. 意識して設けている b. ある程度設けている c. あまり設けていない
d. 設けていない e. その他 ()

Q67. 指導について現在、悩んでいること、または問題点がありますか。

a. ある b. ない

Q68. Q67でaと回答された方に質問です。

具体的に悩んでいること、問題点をご記入ください。箇条書きで結構です。

※例) 選手の挨拶・返事ができない、明るさがない、元気がない、大声がでない、体力がない、コミュニケーション能力がない、指導者が少ない、保護者の協力がでない、ボランティアである、塾に行きすぎる、野球用具が高すぎる、など

Q69. 学習塾に通っている選手はいますか。

- a. 非常に多い b. 多い c. 半数ほど d. 少ない e. いない
f. その他（ ）

Q70. 最近の選手たちの体力低下を感じることがありますか。

- a. ある b. ない

Q71. Q70でaと回答された方に質問です、それは、どんな体力要因ですか。

- a. 筋力（大きな力を出す能力）
b. パワー（敏捷に、瞬発的に運動を行うことができる能力）
c. 無氣的持久力（酸素をとらないで運動を続けて行うことができる能力）
d. 有氣的持久力（酸素をとりながら運動を続けて行うことができる能力）
e. 柔軟性（体の柔らかさ）
f. 調整力（器用に運動を行うことができる能力）
g. 体力は特に必要ではない
h. 不明
i. その他（ ）

Q72. Q70でaとお答えいただいた方に質問です。

それはどのような瞬間（練習時、トレーニング時など）に感じることがありますか？

※ その場面を具体的に記入してください。

Q73. 一般論で、勉強をするだけの子、スポーツをするだけの子の二極化を感じることがありますか。

- a. ある b. ない

Q74. 文武の両立を目指しますか。

- a. 両立を目指す b. 今の時代、両立は難しい c. 野球は能力、一芸を伸ばす
d. その他（ ）

Q75. 野球以外のスポーツ経験を持つ選手はいますか。

- a. 非常に多い b. 多い c. 半数ほど d. 少ない e. いない
f. その他（ ）

Q76. 野球以外のスポーツや運動遊びを取り入れた練習をすることがありますか。

- a. ある b. ない

- Q77. Q76でaと回答された方、それはどんなスポーツですか。※複数○可
a. サッカー b. バスケットボール c. バレーボール d. テニス
e. バトミントン f. 柔道 g. 剣道 h. 陸上 i. 水泳 j. スキー、スケート
k. マラソン・持久走 l. その他 ()
- Q78. 同様に運動遊びについて。※複数○可
a. 馬跳び b. けんけん c. 逆立ち歩き d. 平均台歩き e. 縄跳び
f. 手押し車 g. おんぶ h. だっこ i. 鉄棒 j. 前転・後転
k. その他 ()
- Q79. 今の選手たちは、運動遊びの中でどんな動きが得意だと思いますか。※複数○可
a. 走 b. 跳 c. 投 d. 泳 e. 登 f. 打 g. 蹴
h. その他 ()
- Q80. 今の選手たちは、運動遊びの中でどんな動きが不得意だと思いますか。※複数○可
a. 走 b. 跳 c. 投 d. 泳 e. 登 f. 打 g. 蹴
h. その他 ()
- Q81. チームの中に障害(故障, 怪我)を抱えている選手はいますか。
a. いる その部位はどこが多いですか () b. いない
- Q82. コミュニケーション能力に欠けた子供を指導した経験はありますか。
a. ある b. ない
- Q83. Q82でaと回答された方に質問です、どのような子供でしたか。
a. いじめ b. 閉じこもり c. 不登校 d. うろつき e. きれる
f. その他 ()
- Q84. チームに共通の指導マニュアル(指導書)は、ありますか。
a. ある 指導書名 ()
b. ない
- Q85. 選手の個別指導記録ノートなどはありますか。
a. ある b. ない
- Q86. 現在、地域との連携について意識したチーム運営及び、指導をされていますか。
a. している b. していない
- Q87. Q86でaと回答した方に質問です。具体的な活動内容をお教えてください。
※例) 市町村の祭り, スポーツ大会に参加, ボランティア活動に参加, 清掃活動など

--

ジュニアスポーツにおける指導の現状と今後の課題（その1）（大島寛・大島建・大島安奈）

- Q88. 野球競技者の成熟期・ピークパフォーマンス年齢は、おおよそ何歳だと思いますか。
a. 15歳～20歳 b. 21歳～25歳 c. 26歳～30歳 d. 31歳～35歳
- Q89. 今後の野球界について、サッカーJリーグのように指導者資格が必要だと思われますか。
a. 必要だと思う b. 必要と思わない
- Q90. その理由を記入してください。

- Q91. 現在、指導している選手が将来どのような選手になって欲しいですか。

ご協力ありがとうございました。